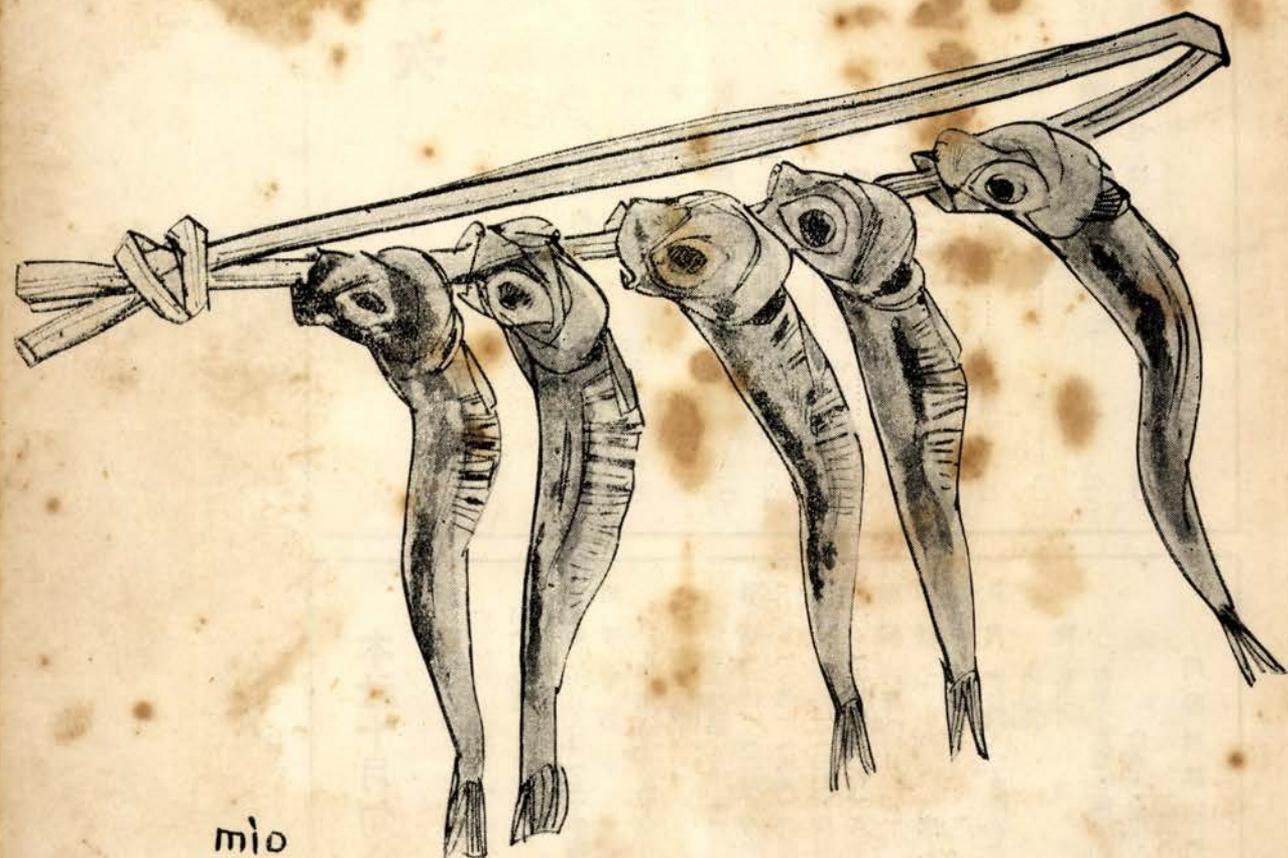


法 雅 柳

麻生路郎主



mio

Pensej flugas trans la laud-limon

The Senryu Zasshi No.341

號 月 十



十月號目次

(昭和三十年)

題字……………麻生 路郎
表紙……………米田三男之介

窓 口 談 義……………麻生 路郎(三)
本屋のユーモア……………長野 文庫(四)
永久に咲く 福 壽 草……………富士野鞍馬(一〇)
伊藤定美さんを訪ねて……………丸尾 潮花(二二)
新川柳鑑賞……………麻生 路郎(二〇)
敦 盛 さん……………大西 八歩(二六)
阿波へ歸りに……………諸 家(三三)
努力する体験……………山本 葉光(一九)
異国 柳人記……………東野 大八(九)
権力と川柳……………戸田 古方(二四)
山雨楼氏を偲ぶ……………吉田 水草(三三)

★

不朽洞句帖……………麻生 路郎(三)
川 柳 塔……………麻生路郎選(四)
同舟近詠……………諸 家(一〇)
近作 柳 檣……………麻生路郎選(二四)
北川泰集選(二四)
一路集 「噂」……………松江梅里選(二六)
「支 払」……………小川恒明選(二六)
各地 柳 壇……………(二七)
川柳第二教室
作句指導……………戸田 古方(三三)
質疑に答える……………清水白柳子(三三)
不朽洞会から……………(三四)
柳界 展 望……………(三五)
公私 雑 記……………(三六)

本社十月句会

爽涼の作句シーズン、お誘い合せてお出かけ下さい。初心の方も来会を歓迎します。

日 時 十月八日(土)午後六時半
場 所 光明寺

大阪市天王寺区下守町二丁目・市バス停前(市電・下寺町又ハ日本橋三丁目下車)

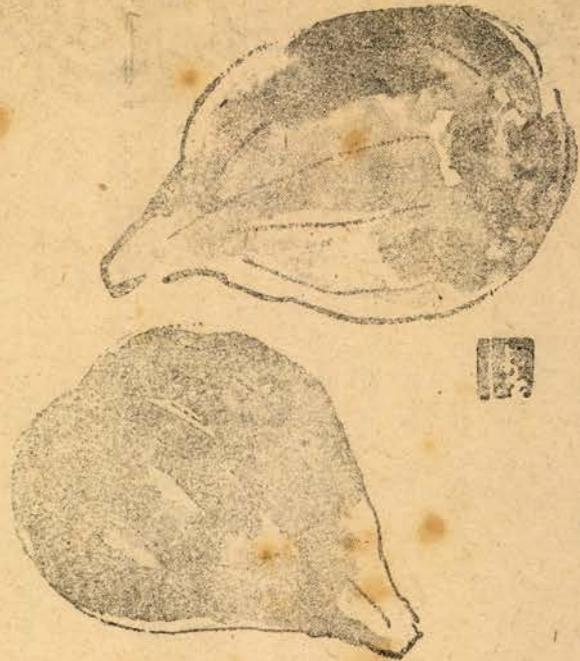
兼 題 「一泊」(二句) 麻生 路郎選
「食慾」(三句) 武部 香林選
「算盤」(三句) 菊沢小松園選
「人柄」(三句) 八木摩太郎選
三題(当日発表)
席 題 三題(当日発表)
柳 話 麻生 路郎
句 評 戸田 古方
呈 賞 ★各題天位★路郎選天位に不朽洞賞
会 費 五〇円
幹事 紫香・淡舟・いさむ
白水・雄声・凡九郎

川柳雑誌社句会部

不朽洞句帖

麻生路郎

老人の日だと新聞だけで知り
秋の風こども蔵に突当り
朝夕はなどと云うてて浴衣で来
宿命か橋際の役をまだつとめ
未亡人これもだまされたと思ひ



窓口談義

川柳十七音字

近ごろ私は物の形態フォルムということに就いて非常に興味を感じるようになった。以前からも感じていたのではあるが、それを意識的に再認識するようになったと云う方が、正しい云い方かも知れない。物の形態を美しく感じるためにはその物が適正な環境におかれねばならぬことも考えられる。

軸という形態、額という形態、いつ誰が考えたのか知らぬが、初めから軸や額があんな形態で存在したとは思えない。軸や額が誰の眼にも、コレは軸、コレは額というように認識される形態をそなえるようになるまでには時間的になり永い歳月が流れていることだと思える。そして軸は床の間に、額は壁間という形式も誰の案だか知らぬがいつの間にか決定づけられたのであろう。

軸や額を便所や台所にかけられぬことはないが、これを鑑賞するのに適正な環境と云えば矢張り、床の間であり、壁間であることに落ちつくのではなからうか。

作品の点から云えば、どちらも画であり、書であるが、軸はどこまでも軸であり、額はどこまでも

額である。軸を壁間にぶら下げ、額を床の間にかけるとなんだか落ちつかない。これはその物の形態と周囲との釣り合いがそぐわないからである。そこに軸は床の間に、額は壁間という形式が生れたのであろう。

以上は、その一例であって世のありとあらゆるものに、形態と形式がある。そして、それ等の形態や形式をジッと眺めていると、それぞれにそれ／＼の味を持つて、いることに興味が湧くのである。私たちがよりよく生きると云うことは、それ等の物のすべてを自分の生活の中に、よりよく消化することであろう。しかしながら、世のありとあらゆるものを、自分の生活の中に、消化するということは云うべくして行い難いことである。

そこで私たちは、カメラマニヤが、世のありとあらゆるものの影像をカメラの中にとりいれようとしているのと同様に、川柳という一つの形式の中に、それ等のものをとりいれて、自分のものにしてうとしていくのである。巧く自分のものになるかならぬかは自分の腕にあると云えよう。しかし、他人がものにしたとしても、優秀な作品は国宝と同じであって、みんなで鑑賞することが出来るのである。素晴らしいではないか——川柳の十七音字。



ホノルル市 白砂旋風
泣き言を少しも言わず脱税し
資本家は機械はストをせぬと言う
大阪市 正本水客

石川ひさみさん病氣帰郷
風鈴の下で帰郷の便り読む
母と子の音じめ二階をつゝ抜ける
大阪市 北川春葉

兵庫県 戸倉普天

早発ちにエプロンのまゝ見送られ

耳にまで飾りをつけながらぬ顔

月給の安い順から出勤し

鶴の様に瘦せてスカート涼しそう

大阪市 市場没食子

泳げないからとて山へばかりゆく

秋の陽となれり机の位置も変ゆ

ホノルル市 内藤草一郎

本棚のすいた処は貸した本

常人と違ふは酒が強いだけ

親の恩わからないうと子に云われ

嫉く様な人は居らぬと猪口を差し

葬式で人の遺産を案じ合ひ

豊中市 戸田古方

合部屋のマアいびきまでそのまんま

婿殿をもつと美化して父と母

チヨキンと切るだけで三週間ですと

米子市 三嶋美笑

下ッ端は何処へ変ると気にもせず

喫茶では女で足りる金を持ち

信濃善光寺

池浅く空の高さをうつさない

憂鬱な顔が似ついているビール

あられ酒古都たそがれる色と知り

親を悪く云う人の顔見ていたり

信州にて(三句)

聖牛の白さ印度の香をたゝえ

街に満つりんごの青を眼に残し

雲も秋忠次の落ちて行つた道

白樺の床柱よし旅の眼に

公職をのいて夫婦でする散歩

見物もせず温泉で碁を囲み

晩酌の相手なきまゝ虫を聞き

雪溪へいどむは若い声ばかり

浴衣着て出れば平湯は山の底

兎も角も城を写してそばを喰べ

吸殻を一ぱい貯めて友は去に

整形が君の魅力を奪い去り

池田市 黒川紫香

大阪府 丸尾潮花

大阪府 水谷竹莊

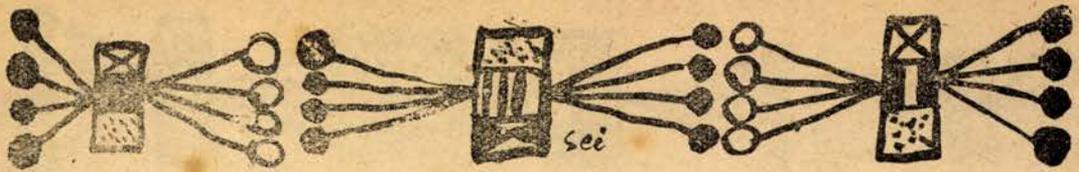
大阪府 武部香林

大阪府 尾崎方正

大阪府 清水白柳子

大阪府 出雲市 尼緑之助

大阪府 水谷竹莊



投げキッス若い気やなとひやかされ
みをつくしの鐘麻雀は気にもせず

下関市 弘津柳慶

子の作文それから〜で綴られる
行水へラジオ大きくかけさせる

兵庫県 小西無鬼

賛成署名取消

風吹けば秋の木の葉に似た議員

梵鐘の僕も寄附した音が響き

涼しくも一ト夏きりをキリギリス

大阪市 吉田斜水

冷房を出て八月の汗となり

出勤簿二人休んで疑ぐられ

尼崎市 小林文月

始球式だけに会長顔を出し

山の家食膳に足らぬものが出来

大阪市 富岡淡舟

閑人にねらわれ遂に蠅即死

つまりその金が借りただけのこと

仏壇は質にも入れず光ととり

奈良県 飯降白香

盆踊最後はマンボ調となり

募参り盆会の鐘は鳴りに鳴り

奈良県 西辻竹青

北浜の挨拶今が買いどころ

世の中のうつり変りも妻の髪

山口県 長野井蛙

護送する方はあこひも寝もやらず

舞扇恋人のあるしなでなし
大自然花も私も生きている

大阪市 麻生梨里

どうせせなならん苦勞と悟って来

石橋を叩いて恋に見放され

アブレだと思いたかビールにさそてくれ

掌のかたさに心包みたり

感情と別に生きるも女にて

づけ〜と云える無邪気を羨やまれ

布施市 森下愛論

アルサロのサービス過ぎて怖くなり

立話ボリスとすれば人が寄り

宿題は子供眠たいものと知り

岡山県 直原七面山

恋多忙洋裁学校欠席し

せがまれて男電気を消しに立ち

殺してと女は恋に強き者

大観の富士が扇子で雲を呼び

大阪市 西森花村

高野山一の橋

こゝからは勝手にゆけとバス帰り

参道の墓石先着順のよう

賠償もきまらぬ内から軍が出来

鳥取市 河村日満

野球見るのに会社までまし

追加炊きして食べ足りた子が眠り

松島へプラン退職してのこと

栄転の邪魔をしあつて平社員
惚れてまんねと大阪の人真面目

岡山県 福島鉄児

十八で男をだます術も知り

チンピラのスリ団長は女の子

卓上の電話裸のまゝ話し

大阪市 谷内一草

横道へ横道へそれを恋という

木の間も陽射しへ平和だなと思

大阪市 榎南夏六

降車口財布すられたのに気付き

降車口待ちくたびれた顔でいる

大阪市 西いわを

受付は暇でたまらぬ顔で待ち

岡山県 服部十九平

向い風女三人無口なり

予算だけ言うてマダムに委せとき

銭湯へパパママ三人ずつを連れ

大分県 桑原養痴園

ロハ患者連れて駐在かしこまり

ノートルスで兄の学資をかせいでの

兵庫県 若林草右

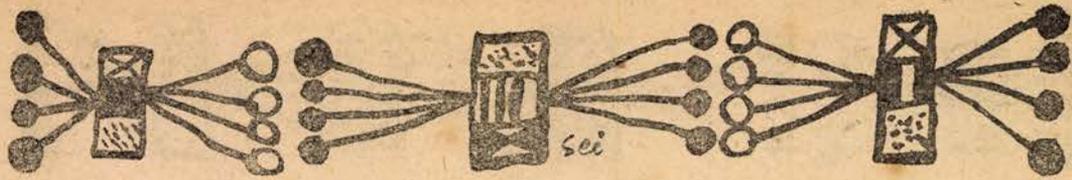
よい鴨と義手のさし出す募金箱

貸ボート死ぬとは見えぬ顔を乗せ

虚無僧の天蓋一沫の涼を生み

大阪市 足立春雄

働き蜂に終った棺の蓋をしめ



連れ立った見舞後で頭下げ

女アナ皆んな十九の声をもち

エチケツト知って反つてうとまされる

流行医者エコノミストも読んでいる

熊本県 有 勤 芳 仙

妻連れて来れば飲み屋のよそくし

ビニールの金魚彼女はまだ若い

乳母車花火の見える所まで

盆踊り腫が働けば手が遅れ

職安ヘラッシュの流れから外れ

出るものは出すさとニキビ見つめられ

教養が眠くない子を昼寝させ

高知市 大 西 迷 窓

常連が又連れて来た貸しの客

君の夢覚めて気がつく潮の満ち

下関市 石 川 侃 流 洞

深緑の中病棟が白すぎる

気短かの万年筆はまた振られ

ピンボケのまゝ約束が届けられ

広島県 山 田 季 賛

もつれ糸我が人生を論される

よくしゃべる二人が二人ニキビの娘

大阪市 山 本 葉 光

終戦十年を迎えて

世界地図壁に貼つてた過去もあり

育つ娘が先妻に似る言わず置く

人権を見とめてねち／＼説論する

繁昌の隅の常客忘れられ

警戒はしたがやっばり裏切られ

倉敷市 木 村 千 容

老妻と話がなくて差向い

大空へなら対等で話せそう

七夕へばゞの精魂傾ける

倉敷市 田 垣 方 大

開襟ですむのに冬のモーニング

乳房までつかりこちへ向きなおり

悪童がいるぞトンボよ高く飛べ

もう一つ蚊取線香をたくへボ恭

石川県 那 谷 光 郎

湯上りの師匠にきつい坐りダコ

二三冊祖父の悪書もある曝書

男の子桂馬に下駄を脱ぎすてる

高槻市 福 田 丁 路

貞操の危機をはらんだアルバイト

信州上高地にて

上高地銀座もあって苦笑する

倉敷市 水 谷 谷 水

羨ませて嫁つたが十日もたなんだ

謹厳居士然としてたら抓られた

宿命か女今度も生き残り

委員とは草むしりまでせにゃならず

行商もするとは二号哀れなり

三十はでまいと言っただけで妬き

お歳暮はお歳暮袖の下は下

倉敷市 梶 原 一 善

本妻の死後も二号のまゝ置かれ

芋洗う様な海でも行きたがり

ガマ蛙お前も月を見てるのか

岡山県 田 村 藤 波

爪先で埃の本堂見て上り

与太ばかり飛ばしてチップ呉れず去に

眼の埃意中の人が取って呉れ

岡山県 政 田 大 介

軽井沢から戻れば残暑身にこたえ

早魃へパンパ踊りを踊らされ

岡山県 岡 村 牛 耕

貴女似よ分別臭い顔をして

汗性のことまで嫁のすみません

迂濶にも年増の柄を買うて来た

み仏の乳房科学が撫でまわし

今日は今日は犬も寝ている昼のバー

岡山県 本 田 恵 二 朗

押しつけて先頭に出たらけつまずき

そのまんまトロリと眠る芸を持ち

大阪市 真 鍋 一 瓢

ランナーの型で子供は寝てしまい

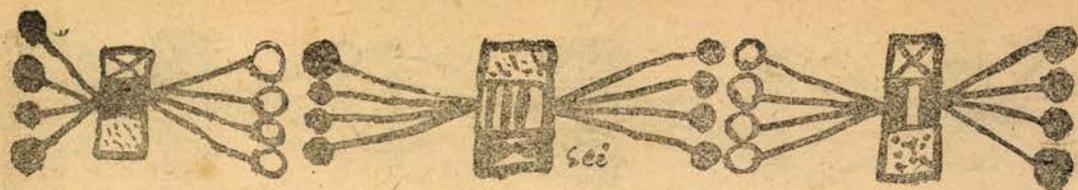
辻占屋おど／＼と来て買わせ

末っ子に負けて西瓜は冷えぬまゝ

雇われたき人あり案山子にうってつけ

天王寺こゝにも霞食う人が

曳子もう午前一時のあくびする



手島一舟さん停年

満期まで気むづかしさを割引かず
すき焼は亭主の余技のようにさせ

京都府 松川 杜 的

一服を点けたばかりに乗り遅れ
上役のもう血圧を気にしだし
夕顔の白さへ西瓜冷えている

大阪市 永田 六 龍 子

健保証皺くちやになる不俥

鳥取市 森本 法 泉 子

どの部屋も裸のまゝで本を読み
流行をみんな身につけ山へ行き
改札に廻路の笠が邪魔になり

大阪市 尾野 お さ む

意地悪な女にみせるコンパクト

大阪市 飯 島 二 桂

降車口出ないうちからヤアとアラ
カメラ買ってから長雨の続くこと

大阪市 岩 島 雄 歩

独走の足元税務署見逃さず

男の目意識しているコンパクト

倉敷市 松 村 万 古

夏帽子子供はメダカ掬い上げ
美容院焦熱地獄とは云わす

公平な暑さへ愚痴をさし控え

泳ぐより父うさんやはり呑みに行き

倉敷市 藤 井 春 日

焦れたいお方やチャンス拵えたに

泊る気へあんだ終便何時です

子供まで活気づいとる月給日

シェミーズでお稽古つけてた御師匠さん

大阪市 木 口 賀 峰

表にも居ると押売り念を押し

旅行するかも知れないとうまく逃げ

夏痩せのズボンへ入れる物多し

高野山下戸は早寝をしてしま

岡山市 津 田 麦 太 楼

夕立に瀬戸物屋だけ店を開け

後添を乗せて浮雲スクーター

東京の釣師じゃそうなヘルメット

夏瘦の女房やもりの様に寝る

米子市 小 西 雄 々

逢えばすぐ嬉しい歩調になる二人

別室もスリッパ二足ぬいであり

鎌倉の朝寝を記者が起しに来

岡山市 浜 野 奇 童

腹の立つ噂を妻も聞いてくる

失敗よなどと遠慮もなく堕ろし

申カツのマッチ貯めてる四十代

吹田市 橋 本 幸 男

花束しっかり抱いて羽田発つ

堺市 高 崎 雄 声

お婆さんのおしゃれ頭の地まで塗り

訪問の先ずテーブルに威圧され

出来るだけのべんちゃら言って疝にふれ

岡山市 三 枝 一 策

よう喋る代理が詫びを云うて去に

大阪市 吾 郷 玲 人

終戦十周年の日に

今日迄の命の蔭にサツマ芋

アルサロで書いて会社へ出す辞表

友人に警視が二人居る守衛

売れるまでゴミの捨て場にされる土地

ヤア〜と来て申カツの席を割り

西宮市 若 本 多 久 志

愛してゐると無造作に女言

支度金不要へ女気が動き

又一人生れて前途多難なり

買収はされぬつもり箸をとり

話そろ〜来年の参議院

島根県 藤 井 明 朗

竜頭ヶ滝にて

どの顔も浮世忘れた滝にいる

岡山市 永 松 東 岸 子

内職のつよみか妻の派手になり

信じるも女疑うのも女

おじさん〜と予防線を張り

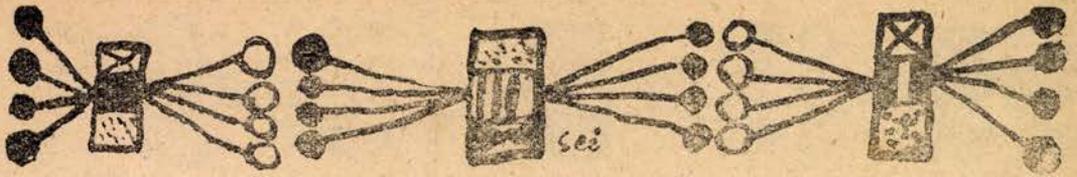
俺の買う魚を犬に買うて去に

丸刈りの父へ見習う子沢山

浮気しておやんなさいとなだめられ

倉敷市 野 田 素 身 郎

誘ってほしい人は誘ってくれぬ海



此の通り 誰に手足せる 婦人服

夏山へ荷物を持たすのに誘い
麻雀がすぎた書類の誤字脱字

倉敷市 安原斜木

明治型子の反感へ折れて出す

強引な集金得意を又減らし

美しさフツと死にたい滝の音

公休日六畳せまい本と吾

大阪市 西川恵風

待合へ職務としての女秘書

宿題へ父の常識だけ借りる

岡山県 片山巷雨

叱られた子に衝角で迎えられ

吹田市 菊田いさむ

生意気に声帯模写で子の返事

買うて来た小鳥の世話は妻にさせ

大阪市 神谷凡九郎

妾心を呪い囹圄に生きつゞけ

そつとときましまし父ちゃんの頑固

僕も亦恋の過去あり日記帖

大阪市 清水望峰

住みついて見れば名所もただの里

こおろぎの他は我が家へ来てくれず

大阪府 川端鬼酔

みをつくし大人が聞けばまだ十時

銀婚式二人は今も惚れている

片割れを警察も兎も角慰める

これでもかと云う程夏の婦人服
八文字角屋の庭で踏んでみる

大阪市 木村十悟

ひたむきな努力へ神がおわしまし

打ち水をベッタはばきき散り

入口は此処から昇る立見席

薬局も歳の故やとうるさがり

大阪市 不二田一三夫

背が違うのにおんなじ柄を買

本持つて便所へゆくも親譲り

二階借り外で小便して帰り

燕ほど父は運んでくれぬなり

洗濯機こゝは外から見える位置

盆踊り仏の守は祖母一人

兵庫県 酒井ひか平

暑さにはピン／＼してる十二貫

ラジオ体操今更やって照れ臭し

断崖に立った俺のせいにする

倉敷市 長尾越鳥

怒鳴りつければよけい静かに口答え

薄馬鹿が急場を告げてばやですみ

母ちゃんの財布日毎に場所を変え

倉敷市 佐藤千代春

又しゃべるつもりか水を貰いに来

同舟近詠

須坂市 高峰柳児

食中毒値切った事へ触れて居す

売春法生きてく手段をおびやか

左遷とは知らず子供ははしゃぐなり

停留所喪服の客で一寸泥み

松山市 前田伍健

これはまあと母を笑わす綴り方

あほらしい話で今日の苦を忘れ

腹の立つ日へはがきまで不足税

拝観料出して「と云う」ものを見る

金沢市 安川久留美

詐欺という坊主もヤミの米をたべ

夏祭りきょう燐曳の砂をふみ

椅子けつて起つ勇氣なく詫を云

使うすべ知らず卑しい金をため

利用した後は先輩煙たがり

今治市 長野文庫

国文学 解釈と鑑賞

川柳

十月特集

増大号

古川柳から見た江戸庶民生活

◇ 文学博士麻生磯次氏外

諸大家執筆

価一五〇円・送 八円

東京都新宿区
払方町二十七

至文堂



異國柳人記

東野 大八

長い大陸生活の間で、いろいろの人間と付合ったが、今日は日本人以外のアジア民族に川柳がどういふ風に映ったかを、わが交友録を通じて書いてみることにする。

大陸に永いこと生活しても語学の方はさっぱりで、殆んどが思うさま任せにしている。その方がこちらは苦勞がなくてよい。ナマジつかぬ言葉が使えぬからといふ氣になつていたのでは、いつ失礼なことになるか、中国人なんか面子第一主義だから百年の親交をひときで失う例は多い。従つてこゝに登場する人々は、すべて日本語の堪能なるお方と承知されたい。

奉天に在る時、王義発なる中国人とじつ懇になつた。省公署の主任さんで、顔が馬みたいに長く、眼がしよぼしよぼしている。私は彼を駝馬先生と呼んだ。歳が近寄つていたので何とはなしに氣が合ひ、よく日本人街へバイ一に出かけた。日本語がタはずれに巧いので、のみ屋の女たちは一樣に彼を日本人と判断した。因運隆

隆として日本も当時一等国だったので、彼氏国籍を間違えられても恥とせず、いや却つてこゝろ嬉しい顔で、大木義夫なる日本名までつけていた。この男に私は川柳をやれと説いた。一ぱい飲みながら、しやれた古川柳の一つでも口にしてみな、慌て者のお女中なんてついコロリだ、なんておだてた。その氣になつたか彼、モリモリ句を作つた。随分作つたもんだが、覚えてゐる句は次の二句だけである。

おでん屋はうれしや湯気でカンがつき
一度きただけお久しぶりなどと
いう
二つとも大したものではないが、漢民族がこれを作つたといふことに筆者、その意義を認める次第。彼は今どうしていることだらうか。

お次は、ロシア人ニコライ、通称ニコ。わが社主催のロシア美人座談会に通過して登場してから私と知合つた。江戸弁でよくものを言

う。日本語ならなんでもコイだが、時折ワケの判らん単語があるので閉口だ、と言つていた。「雲助」をグライダの機織士と訳したのは、正にマイ訳であつた。この男にも川柳を奨めた。一句作らにヤオゴつてやらないよ、と言つたのでしようことなしに十七字にしたがある。

君恋しうたつて酔うて平康里
というのである。君恋しは昔流行つた歌でニコの十八番だつた。平康里とは満橋街の呼称である。ロシアにも川柳に似た短唱文学がある、と言つていたが詳しいことは忘れてしまつた。ウワサによると、彼はハルピンの洗濯屋の息子だ、と自称していたが終戦後、赤軍スパイと判明した。私が関東軍の参謀でもあつたらコトである。

三人目は、前号に登場した徐白林、略歴は前号紹介の通り略するが、この創作家は私の奨めて句を作り、作つてゐる間に川柳に興味をもち、満沢川柳に本氣で乗りだしたが、モノにならない内に終戦となつた。

韓信に意地の悪いが尻をかゞし
というのを彼は絶賛してやまなかつた。徐といへば、彼の親友陳松齡にふれねばならない。彼は建国大学助教授の肩書をもち「日本外史」を翻訳して有名だが、日本語は都々逸をうたう徐君ほどではないので、専ら作らざる川柳人をも

つて自任していた。よく二人で飲んで、一等話せる男だつたが、徐と同様文化漢奸に指名され今もつて行方がわからない。好漢いづくにありや、とよく思ひ出されてならない。

北京では西単の新北路といふところに住んでいたが、家主を楊文祥、字名を天台といふ丁大出のインテリだつたが、私の読んでゐる川柳雑誌をみて「中国に竹詩というこれに似た諷刺がありますよ」と一くさり話してくれたが、石原青竜刀氏にきくと「川柳とは全く違ふ」と否定された。

蒙語では、蒙古語の新聞を勤め先の新聞社から出していたので、その編集長のロブスンといふ人とじつ懇になつた。言葉はタダタドしいが、文学は読めるので、日本研究では書齋人だつた。彼が、私に提供した川柳雑誌二、三冊を蒙古語に翻訳したとその新聞を持つて来たが、ハリガネがバーマネントをかけた様な蒙文ではこちらサツパリで、有難う、有難う、とだけ言つておいた。よほど彼の興味をひいたらしく、盛んに川柳誌の貸与方を申込んで来たので、手許にあるのを片っ端から彼に提供した。その謝意でもあろう、某日色紙様の厚紙に大きな例のバーマネントを四つ書いて持つて来た。何の意味だと言つて「柳情莫々」だと説明した。この文字は、当方よ

り先方さまのことだらう、と故岩崎柳路氏と笑い合つたもんだが、柳路さんが
「そない言やはりまっけど、蒙古人が川柳に関心持つたといふことは有史以来のケイ事だつてせ」と嬉しそうに言つた。

最後にずつと以前「維果の酒」に登場した印度人のサバルアル、彼にも川柳を作れとゴネてみたことがある。すると彼は、八つ手みたいな手を空間に振つて「そんなヒマはないよ」とあつさり言つてのけた。印度人が川柳を作る、これこそ哲意深遠のこゝろの歌が出来ると信じたが。

ともあれ、日本にもし戦争なかりせば、川柳はアジア人による、アジア人のための、アジア人の川柳というリンカーンの言葉みたいなことになつたかもしれない。川柳カラチ支部、川維蒙古支部、川維モスクワ支部なんて思つただけでも嬉しくなるし、この日あつてこそ陳松齡君のいう「大同平和」ではなかつたらうか。

川柳雑誌社特製
投句用 柳 箋
一冊(五〇枚綴)三〇円
送料 八円



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔一八四〕
はしゃいだあとの淋しさ
妓にも

客が騒ぐから芸者も騒ぐ。
客を遊ばせるのが商売だから
と云っておかしくもないのに
笑い、はしゃぐ理由もないの
にはしゃぐとは何んと云うな
さけない商売もあつたもので
あるう。一ト騒ぎしたあとの
淋しさはお客もたまらないら
しいが、それは客だけの問題
ではない。芸者に見れば
もつと淋しいのだと云う
のであるが、これこそ芸者心
理を巧みに掴んだ句だと云え
よう。

〔一八五〕

暫多町生る
合併に山紫水明考えず
(灯竿)

あちこちで町村の合併が頻
りに行われたことに對する批

判である。村が合併された。
ダムが建設された。自然が容
赦なく破壊されてゆく。山紫
水明も何もあつたものではな
い。次々にぶち壊されてゆく
郷土を見るにつけ愛惜の情が
この句を生んだのであるう。
作者の公憤が脈打っている。

〔一八六〕

手袋の脱ぎすてられし
きみさよ
(翻骨)

皮の手袋は手にはめていて
さえ太々しくて何んだかぶき
みなものである。それが、そ
こらへ脱ぎすてられて自分の
の身につけているものだと
とても思えないほどぶきみな
ものである。推理小説的な感
覚が出ていて面白い句だ。

〔一八七〕

皆寝かしても女には用が
あり
(愛論)

「さアさ、早く寝ないと学
校に遅れますよ」

と子どもたちを皆寝かせた。
あすの出動があるので夫も寝
かせた。しかし女にはそれか
ら一ト仕ごと家事の用がある
というのである。たしかに世
の女性が宿命的なものを背負
っていることを掴んでいる。

〔一八八〕

機関車も一人で走って見
たかろう
(豆秋)

いつも重い車輛を幾輛も繫
いで喘ぎながら走っている機
関車を見て思わす斯うした声
となつたのであろう。しか
し、この句は機関車に対する
単なる同情を詠んだものでは
ない。年中一家の重荷を背負
うて走っている自分も、そん
な重荷から遁れて、自由な世
界に生きたいという欲望が首
をもたげていることを見通し
てはならない。

〔一八九〕

質屋を出れば今日は満月
(野甫)

質屋——それは暗いものの
象徴だとも云える。その質屋
を夜風の街へ出た途端に眼に
触れたものは皎々と輝いた丸
い丸い大きな月だった。オ、
そう云えば今日は満月だった
なアと気づいたのである。何

永久に咲く福寿草

富士野鞍馬

待望の「福寿草」が拜見でき
た。霞乃女史にお祝ひ申上げる。
この「福寿草」のどこを見ても、
霞乃女史のお年が判らないようにな
っている。年は写真で想像せ
よ！というのであろうか。そこで
私は、お写真の横へ「明治二十六
年二月二十四日大阪生、本名ヨシ
ノ」と、失礼かも知れないが書い
ておいた。明治二十六年は癸巳の
歳であるが、二月生であるから壬
辰九紫火星である。それで、路郎
さんの戊子四緑木星とは相性大吉
である。申し遅れましたが、誠に
御良縁でありました。辰歳の婦人
は客商売で成功するものだが、そ
れも当っている。私の姉が辰歳、
私のいつも行くお茶屋の女将が辰
歳の同年で、霞乃女史はお姉さん
であり、川柳道でもお姉さんであ
る。

人間の卵子は五百位しかない
が、魚の卵子は数百万というのも
ある。それはみな、かえって成長
するまでに食われてしまつて、残
りが丁度よいようになつて、
鰻の子が全部成長したら、日本中
鰻だらけになつて、人間の居ると
こがなくなくなるかも知れない。
刺りに来て意外にうつる磯と
知れ

女の表白、これが川柳に作られ
なかつたら、夫君も、その心持は
わからずに終つたであらう。男な
らネクタイであるが、襟だからよ
いのである。しかし、現今は女の
襟も単調になつた。
飲んでほしやめても欲しい酒
まつき

これは日本中通っている佳吟で
ある。私が、感ずるところあつて
酒をやめてみたら、農妻は、やめ
るなとすすめてくれた。
一生に自分の部屋というが欲
し

お子さんが多いと、そのお子さ
んも同じ思っている。アメリカ大
統領ルーズベルト夫人も、一生に
自分の家に住みたいと言つた。

んと云うすが、しい句である。この句が斯うした情景を力強く写し出したのは七音・七音即ち十四音字表現で緊迫感を出したからである。

〔一九〇〕

ピアス光新生目下バット

莞 (千巻)

煙草の名でデフレの世相をキヤッチした上に、そうした世相にまきこまれた人達を「目下バット党」と詠んだところに興味を持てる。しかし、この句はバット党の深刻な生活苦を描出するまでに突っ込んではいない。それは作者自身の苦惱の叫びでなく、作者の技巧が生んだ作品であるからだ。

〔一九一〕

天人の様に愛人去つてゆき

(秀敏)

あんなに愛してくれていたのと思うのは男の自惚れである。男は免角恋を美化したがるものである。女の虚栄を満たすだけのことがしてやれなければ女はサッサと去って行くのだ。まして生活力の無い男には少しの未練も持たないものだ。しかし、そうした瀬戸際に立っても思切れないのは男ごころだ。この句はその去り行く愛人をまだ羽衣の天人に擬するほどに美化し

ようとしている。

〔一九二〕

附添の診断征露丸をくれ

(甲馬)

「寝冷えの下痢ですよ」と附添婦がこともなげに云う。附添婦の診断である。「布団を脱いだ覚えはないんだが……」と病人が上ね眼づかいで抗弁する。

「幾ら布団を着てたって寝冷えは寝冷えですよ。コレを飲んどきなさい」と征露丸を呉れたと云うのである。自信の強い附添婦の表情が思わされる句だ。

〔一九三〕

予算こままでと工事ほつとかれ

(澄泉)

お役所仕事には予算と云う怖ろしいものがある。予算さえあれば、別にいそぐ必要のない工事でもやっつてのけるが、予算が無いとなると、いくら緊急な工事でも、ピタリと停止してしまう。そして予算がなくなつたと云うことは誰の責任でもないような顔をして工事を中途半端で打ち捨てているのを諷した句である。予算で工事を性質を巧く掴んでいる。

〔一九四〕

下戸の酌間ということ考えず

(矢志志)

酒の飲めない人がお酌をする、どっかマが抜けて見えるものである。事務的に酌をされたのではない気持には酔えない。酌はタボだと云う言葉があるが、美しい女のお酌だといふ過ごす気になるようだ。この句は一滴も飲めぬ人がマも考えず、続げきまにお酌をしているところを詠んだのである。すすめねばならぬからすすめていると云う下戸の顔が眼に迫って来るではないか。面白い発見である。

〔一九五〕

外套が左前だけ女也

(孤浪)

句の表面にあらわれているのは女の外套が左前であること云うことだけであるが、この句を詠んだ時に、この句の持つ内容は決してそれだけではない。男女が同権である。風貌も男か女か判らない。思想も中性であると云う戦後派の女性がアタマに浮んで来ると云う力を内包していることである。これだけの表現でW+Mの女性を遺憾なく描いているではないか。

浴槽へずらり立ったは皆わが子

長女だけ母のさばきが気に入らず

良妻賢母腹乃女史、決して旧型ではない。

二代目の拍手なるぞ正一位 醜儀は空へ消えるか捲たほこ金の奴隷の奴隷となつて御察人

貯金箱またひき潮となりはじめ

こころは、夫君の句風に似通つたように感じる。金持の奥さんを「銀行の隣りに居るようなもんや」と、私の母はいつも評していた。「ひき潮となりはじめ」は、新明和調である。

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス 御夫婦の蚊帳の中、面白く、また有情。

子を連れて出たは去年の藝妓 私の句に「去年来た鶯の子か同じ声」というのがあるが、これは一茶以上の句境である。

娘まだ帯へ纏込む智恵も出ず 泣顔をかくし水屋の前へ立ち

未亡人その冗談へむきになり

こらうい句は、女の領分で男は遺腹した方がよろしい。

籠の鳥諦めたのか空を見ず 拙句に「だまつてる小鳥きげんがわるいのか」というのがあるが、川柳家は、小鳥を見ても情がある。その情が川柳である。電線から落ちる雫もあとやさき

乞食でも先祖は倉もありつらん 私も常々、哲学味の川柳を作りたいと思つている。この二句、哲味を感じる。 どうぞ誤診であつてほしいと母の戀

これには、私も経験がある。 蠶繭修繕にある日ほられたり

これにも経験がある。 明朝可笑 味噌屋は虹の出ているのも知らず

街頭風景、虹、豆腐屋、買う人、女、美、情、時、を十七音に含ませる。

まだまだよい句は、沢山あるが、あまり長くなるので、ペンを置く。

小児科 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇 電話 戎 一六四三番



(畫介之男三) 櫻行柳川の日記

阿波へ踊りに

阿波のマンボは私たちの心を掴んで、
放さない八月十三・十四日の一泊二
日の旅を心ゆくまで楽しんだ

好き哉阿波の踊り

西尾 栗

私が『阿波踊り』という言葉で初めて耳にした記憶を辿ってみると、大正十五年の八月頃であったと思う。当時F銀行に勤めていた友人のSが郷里の徳島から帰って来て、盛大な『阿波踊り』の情景を身ぶり、手ぶりで、話してきかせてくれたのが初めてで、その当時は、所謂『阿波の困自慢』ならぬ阿呆の困自慢として、些か軽蔑的にきいていたが、今度親しく阿波踊りを見て、もうすっかり阿波踊りファンならぬ阿波踊りマニアになってしまった。

鏡の如き航海から始まる愉快な一泊二日の旅の話や優勝旗獲得の手柄話は同行の健筆家に譲るとして——三百七十年も続いて尙益々旺んなくなってゆくこの阿波の踊りの健全性に私は愕然と感心と感激をして暫しやまなかつた次第である。現在私の住んでいる河内もお隣りの大和と和泉も或は其の他の地方も寧ろ盆踊りはすたれる一方であるのに反して、独り阿波の盆踊りのみ態々盛んになってゆくのは、あながち県や市の観光課が、太鼓を叩き、笛を吹き、ポスターを吊る許りでなく、踊る一人一人の精神の在り方が非常に平和的で、自覚的で踊りそのものを楽しむという、純粋性が何よりも大き

午後一時出帆の「さくら丸」に乗船するため、天保山棧橋口に来ると、路郎先生と梨里嬢とは既に来て居られ「川柳雑誌」の社旗は人目を引いた。先生から栗氏と私は当番幹事、幹事は皆が来る迄、社旗を持って待つ役である。マテンプが最後迄、待つてると梅里君が笑う。(八木摩太郎)

昨日から案じられていた天候も今朝は全くの晴天、天保山でいきなり本場の阿波踊りを見せてもらい、何と賑やかな踊りだなアと驚いたり、もう皆来たかとキヨロキヨロするうちに時間になったので船に乗る。昨年の阿波行きは荒れたと云う話に一寸恐れをなしていたので、初めから船酔いのごとが心配になっていた私は、水を

見るなり「波ないね」と云つたら「此処は築港の中やで」と笑われた。あゝそうか、思わず我ながらおかしかったが、乗船する人が沢山並んでいる中で大きな声で要らんことを云つて、照れくさかった。(麻生梨里)

小松島棧橋から十台の観光バスを連ねて踊りの街徳島に一行が着いたのは午後七時三〇分、陽が落ちてまだ間のない徳島の街は既に踊りの渦であった。毎日徳島支局を訪れた一行は、出迎えの夕鐘さんの案内で川雑川柳行燈を肩に鉢巻姿の先生を先頭に川柳浴衣も涼しく踊りの列に加わった。愛二さんは概ね監督の位置、梨里ちゃんから配給されたキャンデーをしゃぶりながら、踊りの審査場に

入った。さくら丸のポर्टデックで習ったばかりの阿波踊りであるが、優勝旗を目指して皆一生懸命である。阿波の殿様蜂須賀公が今に残せし盆踊り、踊り踊るならしなよく踊れ、しなのよい娘を嫁にとる、と賑やかなよしこの節の囃子につれて、キャンデーを握って踊っていられる栗さん、川柳浴衣にサンダルで栗里ちゃん、豆しほりに踊足袋の三男之介さん、洋服の萬葉さん、狸腹の愛二さんと雲染く摩太郎さん、でも見事な盆踊り姿である。カン／＼と審査の鐘が五つ鳴り響くと一度に見物の拍手が起る。気を良くした一行は踊りながら次の審査場へと急いだ。栗氏夫人曰く「アイスキャンデーを持って踊ってのはたのは貴方一人でしたよ」と栗さんへ甘い声で叱っていられるのを耳にした。「迷い子になっても川柳浴衣はすぐ眼についてよろしいわ」とは摩太郎氏夫人の言葉である。もうその頃の商店街は踊りと見物の渦であった。踊りについていな

けはぐれてしまふと言つた風で、もうこうなつては主人とはぐれまいとなさる摩太郎、栗西氏の奥さんも手を振り足をあげていつの頃からか加わっていられる。朝日の審査場へ入った頃にはもう「川雑」一行全員が踊っていた。「川雑」行燈に川柳浴衣は一段と人目を惹いていた。此処では鐘が六つ優勝旗二本、写真のフラッシュを浴びて益々意気軒昂の一行はそれでも徳島駅前に着くとホッと一息ついた。(丸尾潮花)

態々帰阪である。夕鐘氏に迎えられる、夕鐘氏に送ってもらう。暫しの徳島の地の夕鐘氏との会話も恰も百年の知己のよう、懐かしい思い出、話は尽きない。テープは路郎先生と夕鐘氏を結んでの師弟の愛。小松島陸地から船が遠ざかる。テープは長く／＼引いた。私は目頭があつくなくなった。私は、やたらに旗を振った。

一本の外はどうでもよいテープ
橙舎
ブ

く根強いものにして居るのである。『今年はこれで半分です、新益と旧益と二つに別れましたから』との先生のお言葉に、これでまだ半分ですかと驚く人の渦と踊りの波の中は笑いといと笑いの平和境、聞けばこれで一回の争かいても、一度の喧嘩口論もないという素晴らしさ。それにMとWの時代に、踊る人達の清純さ、男も女も雖し方も同じ揃いの浴衣をきていても、男は豆絞りの手拭を鉢巻か又は頬かむり、女は豆絞りの手拭は襟に、烏道笠で手甲に桃色の裾ばきの揃いのいでたち。もしこれが他の地方で見ると盆踊りともなれば、男が女の長襦袢をゾロリと着て、顔に白粉を塗りたくって、見るからにゾツとする踊り姿であるのに引きかえて、この阿波の踊りの清純さ、清潔さ、もうこれだけでも、すっかり好感の持てるのに、踊り疲れ見疲れて帰る私達の耳に、スピーカーで『踊りの皆さん、もう十一時ですから踊りをやめましょう、そして明日も亦楽しんで踊りましょう』の放送が聞こえると、さしものあの賑やかな狂騒そのもののような舞も踊りも、潮のひくように遠く夢のように流れて、眉山の麓、人口十七万の徳島市は、いつしか静寂にかえって、深い夢路に入ってしまった。

阿波女

八木摩太郎

「讃岐男に阿波女」この言葉

は、必ずしも美の代名詞でないにしても、阿波は矢張り女の国、美人の国である。伊豫二名島と呼ばれた神代の昔から阿波は「大宜都比売」を呼名とした女の国である。それも、阿波美人の系統は、天孫民族の忌部氏を主流とし、それに出雲民族と海部民族とが加ったものだとの説をなす者がある。阿波美人、殊に徳島美人については、文献に徴すべきものはないが、口碑によると、足利氏天下を得て、細川頼春が四国の守護職に任ぜられて、長男頼之は京都に在り上の屋形と云い次子詮春は阿波国勝端に築城してこれを下屋形と云った。当時の勝端は大きな城下町を形成していたが、泰平に馴れるにつれ連歌・謡曲を催し、宴席に必然的に要求される美女を京都の上屋形から呼んで、その血が阿波人の間に流れ込み今に京言葉の片鱗を存しているそうなの、後、蜂須賀家政公封ぜられて、入国するに及び、その養祥地たる



・花浦・典忠・龍万・別後・田吉・里梨・榮・子興美・里梅りよ右列前
てに上船丸らくさの船跡 即天幸・子徳・助之三三・二愛・瀬浦・即郎彦

写真真説

尾張から第二の美人系の血をひいた。かくて治世三百年、塩田の開拓・藍の移植・栽培は、遂に天下に呼号して藍商人の活躍は目覚ましく、その足跡全国に及んでその豪奢も亦並ぶ者なく、到る処の柳

帰った事も想像される。又、夕霧伊左衛門と艶名を浪花津に謳わせた一世の名妓夕霧（或は二代目とも云う）が藩の大坂留守居役稲田雅楽に根曳されて徳島に伴われその愛妾として二子を産んだ事実があり、又小説「鳴門秘帖」に重要な一役を演じている十二代の藩主重喜が江戸から数名の美女を伴い帰った話題さえ残っている。斯くして、それ等の血が別れ拡がって遂に阿波を美人の国たらしめたという説もある。阿波の女はその体の線が柔らかで顔の輪廓もふくよかであることを特色とする様に、氣質も優しい。言葉さえ丸味を帯びて搦き立ての餅を指頭で押す様な弾力と魅力！ 徳島には、徳島の顔がある。

阿波踊句抄

丸尾潮花
優勝旗ポトデッキの風に撮り
見物の足も浮いている阿波踊り
気がつけば踊の渦のなかにいた
八木徳子
思い出は靴で踊った阿波踊
八木摩太郎

十郎兵衛屋敷

暗花明の巷に、阿波大尺の名と共にあまり香しからぬスキヤンダルをさえ残した。「伊勢音頭恋舞刃」「伊勢古市十人斬」などはその尤もなるもの、藍商人達が馴染の美女達を郷里の阿波へ時々連れ

下山清潮
ついつりこまれておれも阿波踊り酒切れただけど他国だ踊らんか
鳴門
渦見んと立てど静かな海だった
金泉万葉

十兵衛屋敷にて
録音のさわりを聴いて茶をよばれ自信ありそうに踊の足袋を買
徳島市にて踊る
天保山
棧橋へまだ踊りたい足で着き

参加者 路郎・清潮・潮花・梅里
・栗・美与子・梨里・摩太郎・徳子・愛二・万葉・典忠・三男之介
吉田の諸氏

ホップのきいた

アサヒビール



麻生路郎選
北川春巢選

強い者が勝さ虫でも魚でも 東京府
機嫌とりく二号にも働かせ
女三十独身主義ではないそうな
手切金値切る役目を言いつかり
同 同 石居 高志

長男誕生

似て居ると言われてそつと抱 宇部市

土になる命と知りつゝ土に生く 宇部市

住宅難はそれとして軒のつばくろめ

平凡な暮し朝顔に水をやり

詩になる林檎の花なれどあつげ 同

W+M嫁に入ったら女らしく 同

P・T・Aいゝデザインを見て帰り 大阪市

朝顔へ外泊をした水をやり

早魃もどこ吹く風の盆踊り

踊り子の輪がふくれてる二十四時

お世辞でも妻を美人と言うてくれ 貝塚市

夏瘦せの肩胛骨がよく動き

屋敷して朝まで踊る稲の出来

遠花火ギブスの向きを変えてくれ

同

同

同

宮本 甲馬

同

同

同

竹内花代子

同

同

同

同

上林 粗影

同

同

同

青籬子にそむかれた色となり

同

同

感情の無駄使いにも似た涙

同

同

仲直りしよかと思ふ虫の声 半田市

同

同

失業の日から朝顔水くれず

同

同

噂ほど進んでほしい僕の恋 金澤市

同

同

千円札あつさり飛ばす扇風機

同

同

怒濤また怒濤くよ／＼しなさんな

同

同

退職金の端数が飲め飲め飲めと 大阪市

同

同

封建の墓ビニールの日傘ゆく 高野山一夜

同

同

院長の血色がよい精神科 脳病院見学

同

同

恐妻を看板にして貯めている 豊中市

同

同

憂鬱を捨てよと鮎の腹光る

同

同

ビクニク蛇の脱け殻風にゆれ

同

同

給料日逃さず行けば早退し 岡山市

同

同

野球放送歯痛の妻へそつとかけ

同

同

金よりも欺されたのに腹が立ち

同

同

水くさいなどと女は酌きこぼす 米子市

同

同

御嘉納を額に老舗の菓子のみ

同

同

しあわせな胎動を知る涼み台

同

同

悪書なら紙背に徹すまでも読み

同

同

幸福をつかむ手相で注ぎこぼし 津山市

同

同

頭脳明智容姿端麗使い込み

同

同

炭焼きの娘と見えぬイヤリング

同

同

叱られているのに背中かゆくなり

同

同

慾のない笑いは奥歯まで見せて 大阪市

同

同

すすきにはすすきの命風まかせ

同

同

藤村 梨花

同

同

岩川 一貫

同

同

松永 恒青

同

同

早川 野甫

同

同

宗高矢寸志

同

同

加納山茶花

同

同

勝田 正郎

同

同

定金 冬二

同

同

同

本屋のユーモア

長野文庫

「お父さん、本をかうからお金を頂戴」と至極当然な顔をして何がしかの金を貰い、本屋から似合の参考書を買って戻って一応それを見せておけば其の本の所有権と処分権が我がものとなる学生にとって、本と云うものは誠に悪用するに都合のよい品物である。他の学用品でも応用出来ぬこともないが、大体に於て書物が一番効果的である。

本代と云えば素直に父も出してさてその本を翌日学校へ持って行って友達に見せると、悪友の一人が忽ち一計を案じ、家へ帰って「お父さん、英語の参考書が一冊要るんですが三百円下さい」と金を貰って本屋ならぬ友達の家へ行って、その新刊参考書を借り受けて悠々戻って来「これを買ったよ」と云えばそれで結構三百円騙取出来る。併し父親もそんなに甘くは出来て居ない。かつてこんなことをやった父親だったら「蔵書印を捺しとけよ」とか「名前を書いておけよ」とか云って止めを刺しておくだろう。

体験があり父うっかりと騙されず

「本なら〇〇堂で借つとけ」と



盆踊り仮装手伝うのも愉し 鶏のスタイル家鴨見て悩み <small>岡山縣</small>	同	松下 衡陽	身に合わぬ服も嬉しい退院日 <small>大阪府</small>	同	原 牧童
新築の風鈴裏にも表にも 先妻の写真置場にも困り <small>大山市</small>	同	藤田 凡々	神様は母にまかして療養し ボーナスへ徹夜も嬉し出納課	同	同
未練などないに手紙をよう焼かず 母さんも美人でしたは人の口 <small>兵庫縣</small>	同	小西富士子	日焼した顔で欠勤やって来る <small>兵庫市</small>	同	奥村 芳城
洗濯して上げ度い様なシヤツで来。 <small>兵庫縣</small>	同	同	夕涼みだけの化粧が待たされる 間違ったクイズへ愛嬌点貰い <small>長男別居</small>	同	同
消費税落しときなと売る煙草 たくましい商魂見せる包装紙 <small>大阪府</small>	同	板東千代美	大学を終え父さんよきようなら 結局は嫁に従う子に終り <small>長野市</small>	同	森本黒天子
双親が惚れてるだけの養子さま 暇のある膝で縫うてる撥袋 <small>大阪府</small>	同	同	戦争はスキーの靴も履きつくし 神楽見に行きたい屋寝素直にし <small>島根縣</small>	同	同
発車ベルとうくく恋の人は来ず 流れ星この頃便りがとぎれ勝ち <small>岡山縣</small>	同	梶尾 節子	天の川地球も恋の涼み台 風流と言われる金と暇を持ち <small>大阪府</small>	同	同
海だけの恋それでよいサンガラス ガム噛んでする宿題がはかどらず <small>大阪府</small>	同	安井 久子	一豊の妻で手形を切りぬけた 瘦我慢の通らぬデフレ第三期 <small>大阪府</small>	同	三木 楨林
乗り降りへ裾をつまんだAライン <small>大阪府</small>	同	同	幸福は子に砂浜に埋められて 子に意見しようとすればヘイマンボ <small>出雲市</small>	同	同
無量寺へアベックで行く父と母 耳の底ほじくる様に蟬しぐれ <small>大阪府</small>	同	同	君怒り給うなこの暑いのに ピストルもさげてポリもん暑かろに <small>山口縣</small>	同	竹原 雲平
注文に追われてミシン歌も出ず ステップが乱れるほどの虚をつかれ <small>兵庫市</small>	同	平山 港雨	万障御繰合せの上が雑談 ボーナスが近づいたので良く勤め <small>山口縣</small>	同	安平次弘道
妹の旦那の世話で職に就き 暑さには平気の南方生き残り <small>倉敷市</small>	同	同	バスコンを止めたに出来はあわて 花言葉そんなセンチな恋はせず <small>滋賀縣</small>	同	同
賢妻の手綱さばきに似る鶴匠 テレビ喫茶ジュース一滴ずつす <small>大阪府</small>	同	山本 春也	クラス会出世頭はやって来ず やり直しきかぬ人生淋しい日 <small>滋賀縣</small>	同	久保 和友
団扇はたたく銭形平次読みふけり <small>大阪府</small>	同	赤塚 楽天	合理化の退社願も家事都合 <small>堺市</small>	同	辻 圭水
恋人とガス風呂の値も見て帰り 道楽をせぬ三男は赤にぐれ <small>大阪府</small>	同	同	恋忙し髪爪髭とのびて来る 倒産をせずば今頃係長 <small>堺市</small>	同	同

なら値が下った頃に買い戻せば安いから却って儲かる場合もあるそらだ。

金融の片棒かつぐ古本屋と云う訳だ。

進学した先輩をおだて上げて本をどっさり頂戴し、それをそっくり古本屋へと売り飛ばして儲ける知能犯も居るから油断がならない。

おだてられなめられ先輩馬鹿になり

「近く結婚するのだが、蔵書が少いと女に馬鹿にされるから、

格安で見栄えのする本を買い度い」と云って金文字入りの分厚い法律書、伝記、年鑑の古歴史書などを目方並で買って帰った若い男があつたが、偽の軸物より効果的かも知れない。

本棚に虚勢を示す法律書

敦盛さん

大西 八歩

真つ白な家鴨が二羽、流れてくる餌を求めて、ともすれば激流に押し流されそうな姿で、向う川岸からこちらへ斜かに泳いでくる。

一福亭の裏座敷の二階で、この家の名物である鯛ちりが出来る間、縁の手摺にもたれて、僕の眼はその家鴨の姿を追う。保津川の清流に似た青い水、岩を噛む白い



ブライドが恋遠ざける女にし <small>大阪府</small>	三好 澄泉	金持のなる程こまい芸をもち <small>山口縣</small>	岡本 鳥石
母屋も間借りもアルサロへ御出勤	同	要するに金のないのが妻の愚痴	同
恋愛論課長笑顔で逃げてゆき	同	言訳を考えてたに妻無言 <small>東京都</small>	下岳 周村
皮肉言う出鼻押えた蒸タオル <small>平田市</small>	久家代仕男	八頭身塩鮭の味知らぬ様	同
ダンスバーストリップにも倦き <small>高知市</small>	同	相縁は思わぬ処より来たり <small>大阪府</small>	神田 秀峰
酎チビリチビリ子の出来ほめなぞ	同	相思相愛親の膳立くつがえし	同
退院が近く経済欄も読み <small>神戸市</small>	仲どんたく	女房子も積んで自転車酷使され <small>高知市</small>	岡本 元馬
退院が金魚の行末頼んどり	同	何時来ても値上りばかり言う綿屋	同
冷房のビルから街へむっと出る	同	冷淡にされて病気に打ち克てり <small>具保市</small>	護川 梢月
尻とりが続きまだ寝ぬ子沢山 <small>兵庫縣</small>	出口白猫児	握手をこばまれた手のやりどころ	同
我がベース知らぬ若さの二日酔	同	姉ちゃんの行方を探す宵祭 <small>岡山縣</small>	大石 一久
子に着せる浴衣昼寝もせずに縫い	同	内職の母にすすめる夕涼み	同
新型の水着ルージュの赤いこと <small>岡山縣</small>	佐藤龍山坊	筋違い美容体操無理な年令 <small>具保市</small>	伊藤 瓢一
妻が居て枕カパーが真白い	同	慕参にもホイヤリングネックレス	同
御無沙汰を詫びて帰りの旅費を借	同	雨続く日をニコヨンの髭が伸び <small>熊本縣</small>	淵川 秀敏
マネキン 志願その顔でとも言えず <small>大阪府</small>	北野 水楓	子沢山一人は人間枕をし	同
婦人科医親子二代の老舗もち	同	妥協してよかった猪口が廻って来 <small>大阪府</small>	和田一乃字
正夢の採用 通知読み返し	同	ライバルを見返す地位が低すぎる	同
お土産の貝へ図鑑の頁繰り <small>大阪府</small>	半田 夏生	猫の手も借りたい猫にけつまずき <small>天理市</small>	菱田 満秋
ステテコで歩き女患に羨まれ	同	内証金借りてる人へ焼香し	同
酔辭も覚えて添える自信持ち <small>出雲市</small>	平井 芳風	断水はしても集金きちんと来 <small>大阪府</small>	山本 立児
干瓢のころがっている照り続き	同	お茶碗に凝って子供の無い夫婦	同
一寸見てよと老妻の茶の柱 <small>大阪府</small>	池戸 桃村	香水も封切ですと言う化粧 <small>岡山縣</small>	浜口志賀夫
七夕の笹に小さき夢がゆれ	同	新学期水着のあとを校医ほめ	同
御仏の前でダンスのアルバイト <small>大阪府</small>	堀 須賀太	愛人に反応もなし花の意味 <small>米子市</small>	湯原 一机
親分はシャン／＼と纏め上げ	同	約束を守りに家を嘘で出る	同
凡俗の眼にも青葉を抜ける風 <small>大阪府</small>	後藤 志津	売る時のことも考えカメラ選る <small>岡山縣</small>	鶴見 松太
降車口 大大阪へシカと立ち	同	村長は軽うてえと白ズック	同

川波、川岸の向いは小高い山にな
 っていて、春の桜、秋の紅葉の頃
 はこゝ備後西城町の人々の行楽の
 場所になっている。西城川は、毎
 日観光名勝百選の中にも入って
 いる広島県北部の景勝地である。
 五月の薫風が新緑の間隙を透し
 て、川音のリズムに乗って吹き寄
 せてくる。

「サア出来ましたよ、お上りな
 さい」料亭の仲居お雪さんがちり
 鍋の横に坐って、豆腐の煮加減を
 箸でつまみながら声をかける。

お雪さんは隣の町の庄原から
 来ている、二皮目で下ぶくれの美
 人である。年は三十を出ている
 が、戦前庄原で芸者をしていたと
 云うから三味線は達者である。戦
 後派の芸者と違つて、芸に年期が
 入っているからだろう。

鯛ちりの鯛をつまき、豆腐を食
 べている内、銘酒「比婆美人」の
 酔いが、いつしか旅の愁いを忘れ
 させる。「何か聞かせてよ」と、
 少し鼻にかゝった声で三味線を取
 り上げながらながし眼で僕を見
 る。この眼で今迄に何人もの男性
 を殺して来た事だろう。あぶな
 い、あぶないと思ひながら、
 古典趣味の僕は酒の酔いも手伝っ
 て、蓄音機のレコード仕込みの都
 都逸を口ずさむ。

「朝顔は馬鹿な花だよ」

根もない垣に

生命までもとからみつく
 「ヨウヨウ」とはやして「旦那



人の娘は今日海に逝く乳房固き愛媛縣 鳥井 川島
 炊事場へ廻す団扇を選りに選り天理市 同 仲野花鶴美
 洗濯がみんな乾いて陽が余り大坂市 同 橋本みどり
 消えかゝる花火団扇の手を休め大坂市 同 松島 不在
 カメラぶらぶら幸福そと二人連れ岡山縣 同 田淵 正平
 紅一点五人の智恵に負けて居ず岡山縣 同 土守トシ坊
 死んでゆくにも人間見栄をはり岡山縣 同 横山 生二
 浜焼なぞさげて御無沙汰無心に来岡山縣 同 岡崎 一也
 年は年闊志と別な杖をつき滋賀縣 同 昼田 成雄
 特飲御援け出したい気で戻り鳥取縣 同 橋本白郷子
 一服して行けと子供に愛想され岡山縣 同 酒田 清子
 理想ひとつ下れば広い世と変り岡山縣 同 竹内 啓坊
 空虚な日雲の流れの面白さ岡山縣 同 渡辺あきら
 田草取らせば申分ない嫁だけ岡山縣 同 西本 保夫
 腐れ縁だったが孫に囲まれて大坂市 同 同 保夫
 相談と云うお惚気を聞いてやる大坂市 同 同 保夫
 アルバムに目下恋愛中とある松江府 同 同 保夫
 安楽死願う体で病み細り大坂市 同 同 保夫
 キヤラメル食うと子供は去にた大坂市 同 同 保夫
 良心が負けそうになり夕暮れる大坂市 同 同 保夫
 借金を払うてからは違う夢大坂市 同 同 保夫
 土用丑うなぎの値段を訊いただけ兵庫市 同 同 保夫
 ナイターもビールも好きな平社員玉野市 同 同 保夫
 出張と云うにカメラの胃薬の玉野市 同 同 保夫
 テレビへコップは空いたまんま大坂市 同 同 保夫
 瘦せている暑いでしようなどと大坂市 同 同 保夫
 ミキサーへ歯も胃も退化しやせんか大坂市 同 同 保夫

毒草ならん灼熱の下きつと立ち兵庫市 阿部かつみ
 鬼灯を含んで妬心きるつもり大坂市 同 入口 富夫
 銀婚の旅ハネムーンの宿にきめ大坂市 同 前川 越山
 姉さんは見合妹は恋で嫁き兵庫縣 同 堀内 曉風
 徹夜明け欠伸うつして汽車を降り兵庫縣 同 高野 不二
 洗濯をジャズに合せた愛媛縣 同 藤田 美雪
 つまらない話聞き手になるも旅新潟縣 同 山田 梨陽
 自惚れがあつてもよいとおだて新潟縣 同 野田 一念
 ない袖を振らせるつもり入り込み岡山縣 同 同 一念
 食欲の秋来て読書の秋はまだ岡山縣 同 同 一念
 生活のあがき血を売り国を売り岡山縣 同 同 一念
 恋人でない娘が母のお気に召し岡山縣 同 同 一念
 アベックを大胆にしたサングラス岡山縣 同 同 一念
 ハダカになってまでミスになら岡山縣 同 同 一念
 団結で一糸乱れぬ盆踊り倉敷市 同 同 一念
 物貰いマンボの唄に舌打し岡山縣 同 同 一念
 町会議員に当選大坂府 同 同 一念
 正攻で勝てば選挙もまた愉し大坂府 同 同 一念
 肉休美南京豆に似た女西宮市 同 同 一念
 子の毛腫されど頼りにまだならず西宮市 同 同 一念
 見舞の娘生きる匂いをさせて来る京都府 同 同 一念
 バンガロー此処も女の忙しき京都府 同 同 一念
 水喧嘩結局ポンプ買う話岡山縣 同 同 一念
 打水へ二号跳足ではしゃいで岡山縣 同 同 一念
 御無沙汰の二人職安所で出逢い岡山縣 同 同 一念
 療養を見舞えばあぐらで碁にふり和歌山縣 同 同 一念
 生きていただけが死なれ困り岡山縣 同 同 一念
 集金へミシンの調子又狂い岡山縣 同 同 一念

さんは大分税金を払って御いで「すネ」と、月並みなお世辞を云う。今度はこちらが聴き手に廻って、聴かせて貰ったのが庄原の俗曲で「敦盛さん」。口説き風なひなびた唄で、子供の頃よく聞いた僕の郷里のデコ（人形）廻しの節に似ているところがあつた。因幡の国安蔵や円通寺の村々から鳥取の町にやつて来て、人形をあやつりながら胡弓に合せて唄つた歌調のさびしさを、やるせなさか「敦盛さん」にも流れている。

そう云へば十何年前、金沢の香林坊の寄席で聴いた富山県の民謡「麦屋節」にも、自宅のラジオで聴いた東北の民謡の一つにも、同じひびきが耳に残っている。

西城の町は西城川に沿つて山の峽に生れた偏境の土地である。壞の浦で敗けた平家の残党が、源氏の追つ手の眼をがすめてこの辺りにも入り込んで来た事である。

「敦盛さん」はせめてもの懐古の情を歌詞に托して落人の子孫達が唄い伝えたものに違いない。若くして散つた公卿武士敦盛さんは、又平家落陽の姿でもあつた。僕は数年前、因幡の平家村佐治村加瀬木の里ですばらしい美人に出会つて息をのんだものであるが、その美人の面影に似た人々を、西城の町でもよく見かける。

平家残党の村や町はわびしく、そして美しい。西城の人達は善良で気品があり、老いも若きも煎茶



電報の読めない祖母が先に泣き
洗濯機悪口云うは買えぬなり 山口縣
輝の跡鮮かに漁夫の腰 岡山縣
青畳よこして机置きかえる 岡山縣
煙草盆父の短気の跡が有り 岡山縣
同情はするがまけてはくれぬ税 八代市
株持っておれば時局のよく動き
たま／＼の花見子供を迷子にし 岡山縣
期待した子がヒロポンをうちはじめ
牛の草刈るに農夫の軽二輪 高知市
洗濯機買えぬが腰を揉んでやり
納税のモデル伸びゆく町となり 岡山縣
猪車ベル以来音信不通なり
カメラまだアクセサリーに買えぬ 広島縣
ブレーキがきつ父ちゃん今日酔
日記さえ書けぬに恋文書くつもり 出雲市
血を売った事が気になる苦学の灯
百姓をするには惜しい髭があり 岡山縣
本当の事を言ってる酔っぱらい
心中へ惚れてる方が生き残り 宇都市
暑くとも浮世の義理は身に纏い
姉さんのパットも借りる仮装会 神戸市
歳月は我が太陽をしほませる
仲人が暑の世話もして帰り 岡山縣
婦人科がデフレの中で繁昌し
トルコ風呂みたい間借の暑さかな 倉敷市
豊作だ暑さは言わぬ事にする
こう来たらあゝと言訳用意され 岡山縣

同 田中 秋穂
同 西坂 和子
同 満田 銀風
同 浜野 矢須子
同 建沼 呆亭
同 片山 百郎
同 山田 スミ子
同 持田 勉
同 平尾 向甫
同 岩原 滔川
同 佐野 盛気楼
同 平尾 醉人
同 藤井 五茶
同 宗森 とも子

踊ってもみたい浴衣を盆に買い
男の決断眉毛びりりと動いたり 今治市
一言のすみません女の美しき
怒ったなと思う煙管の叩きよう 岡山縣
手鏡で白髪を探す母淋し
昼寝してモデル五体を大事がり 廣島縣
大学出二人使うを自慢にし
シッターをさるだが奥さんのカメラ 大阪府
平和へ道なお遠し労働歌 宮崎市
扇風機スローにかけて独り寝る 金澤市
免許証忘れたときに引っかかり 笠岡市
笑うのもエチケツトなり座談会 笠岡市
雲の彼方へ愛の山びこはね返り 大阪府
浮気する筈でなかった降車口 大阪府
中古を着て貫祿の柔道着 岡山縣
夕焼の彼女に着せたいような柄 大阪府

退院
抜けて飲ビールの泡もさようなら 天理市
病院の色どり消火栓の赤 大阪府
ペットの花で子蜘蛛居を構え 岡山縣
退職の迫る頃から癒え始め 大阪府
楽しさはく字にさせるバンガロー 鳥根縣
うつむいて弔辞の嘘を知っている 石川縣
泣くが仕事と赤ん坊はつとかれ 天理市
宿命を水玉喜々として進み 貝塚市
みをつくしの鐘を忘れた子を案じ 橋本市
中気かと思うマンボの踊りぶり 米子市
無心云う方の金歯がよく光り 岡山縣

同 越智 義夫
同 有元 孝女
同 高島 玉兎
同 川中 正巳
野口 卯之助
平尾 豊子
木山 桃仙坊
木山 遠二
石本 一子
清水 和夫
西山 晴々
小島 埴生
阪本 貴通
三谷 聖聖
藤井 祐天
山中 翠星
木村 俊昭
中松 一恒
岡田 梅林
今井 東子
岸本 木魚
福代 天邪鬼
山田 ゆき江

をたしなむ。萩焼の小さい玉露茶碗で、上等のお茶を楽しむ。文化は遅れていても、大阪の人達の様に番茶をガブガブ飲んで、金儲けの事ばかり考えてはいない。素質が違ふ訳である。

ちりにも酒にも飽いて、又縁の手摺りにもたれ、夕闇の顔音を聴きながら、人間の生き方を考える。西城の町も佐治の村も、生活は豊かではないが、心の余裕がある。「佐治谷の阿呆」と古来から云い伝えられて、寝物語りにも祖母からその馬鹿振りをよく聴かされたものであるが、「大賢は愚に似たり」と古人も云っている通り、都会人のいやに利口振つた物腰よりも、何ほろ親しみが持たれるか知れない。それは十八年大阪の船場で揉まれて来た僕ではあるが、先祖の墓が佐治谷の近くの小倉村に在って、小倉屋の家号を今でも持ち続けている僕の血に、平家村を懐しむ御先祖さんの亡魂が宿っているせいかも知れない。

努力する体験

山本 葉光

『藤十郎の恋』は偽りの恋で芸に生きようとした名優の悲劇である。スター結婚ブームも『男を知ら



誕生日と賞与日がくい違い	神戸市	飯尾寄与史	岡山縣
雑沓の道頓堀へ涼みに出	貝塚市	小田 柳叟	吳市
仏だけ送って後で会いに行き	岡山縣	阿部 四郎	和歌山縣
幸福の限界を知る草香り	石川縣	州船 明雄	堺市
子煩惱な父で我が家は平和です	貝塚市	杉本 一鶴	尼崎市
マンボ熱島をホールにするつもり	岡山縣	野田 太郎	尼崎市
悲しき恋知って踊りに加わらず	大阪府	長谷川 兎風	倉敷市
郷愁のある夜波さえりズミカル	岡山縣	清水 秋夫	大阪府
灯を消して時計の音がきこえ出し	神戸市	光安比加留	尼崎市
盥盆の客へ西瓜の出来をみせ	貝塚市	中畑とん吉	伊丹市
地方紙はゴシップ欄まで禁転載	岡山縣	佐々部 義志	米子市
検温器はさむ此手で無事と書く	岡山縣	岡 一門	大阪府
初孫に浴衣次々減って行き	野呂藩市	加藤 向水	岡山縣
男とは見えぬ手振の盆踊り	池田市	田中 春造	尼崎市
中元のシャツのインチに一思案	宇治市	柿本 古竹	米子市
待望の退院君と夢が待つ	大阪府	植村杉田津	大阪府
大売出しわれも人なみ駄が当り	岡山縣	亀井 星浦	和歌山縣
ミニージュツクワイレ正午を眠く吹き	石川縣	山崎 北柳	笠岡市
病院は妻を見なおすよいところ	大阪府	塚脇 笑太	今治市
妻にしちや出来過ぎの訛昼寝開き	大阪府	児島与呂志	平田市
豊作にリヤカも鎌も買わされる	七尾市	松高 秀三	天理市
材料費統かぬまにミキサ一居る	鳥取市	岩田天保銭	宇都宮市
ほたる取るナイトの顔の若々し	山口縣	加川 靖真	岡山縣
発展のためと寄附帳持ち込まれ	倉敷市	近藤 千古	米子市
釣竿を英気養うだけに持ち	岡山縣	舞島 白露	今治市
豆攻めの後はなすびで攻められる	大阪府	石田 昭月	岡山縣
桐下駄の軽さを言うて祖父達者	神戸市	西田 幸	天理市
イヤリング忘れなときき宿を発ち	芦屋市	里田 一十	熊本市

バトカーの響へ母が呼ぶ子の名	岡山縣	沼田 三六	岡山縣
市政裏知っていつしかボスにされ	吳市	青木 微醉	岡山縣
表より裏にテレビ先につけ	和歌山縣	田中 雄峰	和歌山縣
水柱の仏涼しい経を聞く	堺市	田中 狂二	堺市
夏休み妻の小言が増してくる	尼崎市	岸本 丹馬	尼崎市
夏休み日記の天候打合せ	尼崎市	針重 白雨	尼崎市
善人の借金足音にも怖え	倉敷市	篠井 泥魚	倉敷市
ふるさとの遠く孝行したくなり	大阪府	藤本 千永	大阪府
神々しいまでに汗出す老農夫	尼崎市	林 澄子	尼崎市
こらえてるお灸の背へ汗にしむ	伊丹市	中屋すす女	伊丹市
宿の下駄はけば財布が淋しすぎ	米子市	遠藤 風車	米子市
五尺八寸もてあましてる日曜日	大阪府	榎本みのる	大阪府
深呼吸 遠い故郷へ続く朝	岡山縣	東 静人	岡山縣
夏休み角帽目立つ汽車の中	尼崎市	真野 逸風	尼崎市
逢うてから自転車邪魔な物にされ	米子市	木村 真彬	米子市
十八九赤いスカートなびかせて	大阪府	中谷ハナ子	大阪府
ぬくそうに着こんだ方が風邪を	和歌山縣	岡本 三楽	和歌山縣
滋雨なるに水屋一人舌打ちし	笠岡市	佐内 隆文	笠岡市
色白い夏で病気かと聞かれ	今治市	越智 一水	今治市
紅白の水引かけた手切金	平田市	日野加寿緒	平田市
アルバイトの道早魃の稲続く	天理市	藤井 千年	天理市
雨待つを満月笑うように牙え	宇都宮市	神田 豊年	宇都宮市
物好きは自腹切っても世話をやき	岡山縣	池田 文女	岡山縣
極道した入墨の腕で茶店出し	米子市	石坂 新雪	米子市
恋人を呼び捨てにする今日となり	今治市	池内 好日	今治市
小器用とはめられながら利用され	岡山縣	三宅 こうじ	岡山縣
優勝の野心など無しフェアプレー	天理市	黒田 香車	天理市
新妻も十姉妹のキッス見て嬉し	熊本市	平野 一字九	熊本市
君の手の温もり残る手を振って	天理市	吉田 季生	天理市

ヒゲトリ後に
アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲトリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

アストリンゼン
 桃谷順天館

ねば芸に艶が出ない」と批評家に囁やかれた為かも知れない。

小説家も人間苦のあるだけの体験が無ければ書けぬと、自分から酒色に溺れた人々も多いようである。

「歌人は居ながらに名所を知ると、能因法師の如く『白河の関』迄の日焦けを創り、体験の歌にした笑話もある。

俳句は自然詠の詩として、苦しい旅で死んだ芭蕉もあり、世界を旅して四季のない地球上の事を知った俳人もある。

川柳家にも嫌な甘さをなめ、喫えぬ煙草や飲めぬ酒を味って愉しい苦勞をして、作句者であり選者たらんと努力するを、愚かな人々と嗤える人は幸福であり不幸でもある。



伊藤定美さんを

訪ねて

(女流作家訪問記8)

丸尾潮花

お母さんと二人暮らしの伊藤定美さんを鶴見橋の自宅にお訪ねした。お勤めは日立造船桜島工場の化工機課である。最近婚約が調い何や彼やと忙しく泥棒を捕えて緋ないですと嬉しそうに話される。先ず柳歴をお尋ねすると

「八年です。でもその間にとてもブランクが多かったものですが、句の範疇が狭く自然心境の句を詠む様になり、何か皆さんに心の底を覗かれていますようにとても恥しく思っています」

「定美さんの処女作は？」

「日立の文化祭の時に『鯨』と云う題で路郎先生に天に抜いて頂きました……」

「(鯨巻くウインチ春の音を立て) そうでしたね。よく覚えていてるでしょう? ハハ……」

「本当、本人の私の方が忘れかけてましたの……」

「定美さんほどの様な句がお好きですか」

「私、センチな余韻のある句が好きです。恋の句でも情のあるもの、又母性愛に富んだ句、何か胸に迫る温か味のあるもの、そして何処となく静かな感じの句を好みます」

「嫌いな句はどうでしょう?」

「余り露骨な句は嫌いです」

「露骨と言いますと皮肉ですか」

「いいえ末摘花式なもの」

「でもそうした句もあっていいとは思われませんか」

「私にはない方がいいと思います。雑誌の権威の爲にも」

「そうですね。作家として」

「路郎先生、霞乃女史、潮花さん、若菜さん、ひさみさん、梨里ちゃん。でも最近ちつとも梨里ちゃん」

も潮花さんのように異性の心をデリケートにキャッチして思ふ儘に作句出来ましたら、どんなに楽しいだろうかと思えます。私など、皆さんに見て頂ける様な句がなくて……潮花さんも頼りにならない門下を持たれたとお思ひになつて辛抱して下さいね」とくすくす笑いながらお茶を進められる。

「舞踊人形を沢山お持ちの様ですね。お好きですか」

「え、フランス人形の類よりもね。音楽でもジャズものよりも三味線ものが好きなのです。潮花さんの舞台も残らず見せて頂きましたわ」

「来春早々御結婚とのことですが、花嫁さんの御感想を伺えますか」

「感想だなんて……と恥かしそうに眼をそむけられる。立秋を過ぎた窓の風鈴が美しい音を立てて鳴り続けている。

「御主人となられる方の希望は?」

「希望って、そうですね、第一

に健康であって頂くこと」

「そして愛情のあるひとと仰言るんでしょう?」

「え、よく生活力って事を言われますね。それも大切だと思えますし結婚の条件だと思えますけど、私達勤め人には健康が資本ですものね、病弱な方では困りますわ」

「お酒は?」

「さあ……男の方でしたら全然お呑みにならない方も氣むづかしいでしょうし、それに理解力に乏しいのではないかと思えます。大酒も困りますが、お酒に呑まれない程度でしたら呑んでほしいと思えます。私も少し位でしたらお付合をしたいと思つてます」と訪問者たじ／＼の御意見である。

「結婚をされたら横浜に行かれるのですか」

「え、それが問題なんですの。私が横浜へ嫁ぎましたら母が淋しがると思ひましてね、出来れば大阪に転勤して欲しいと思つているのです」

「定美さんはお母さんの手一つで養育されて来られたので、お嫁入りなさるについては一しお感が深いでしょう?」

「え、五つの歳に父に別れましてからずっと母の手一つで私と姉が養育されて参りました。女手で二人の姉妹を女学校を出す迄は大変だったのだらうと思ひます。男勝りの母は人に頼るといふことを嫌うよりもむしろ御迷惑をかけま

いとする為、着た切り雀で戦後は男の様に私達の為に働いて呉れました。母のことを思ひますと、いつも胸を締めつけられる様になります。ただ母への感謝の念で一杯です。少しでも楽にしてあげたいと思ひます。でも次々と色々な問題が出来て来ましてね、そんな母ですのにふつと母に反抗してみたい氣持になる事がありますの。そうした時じつと涙が流れて来て、ひとり泣いてしまいます。母は封建的とか旧式とか言うのではありませんが、とてもカチ／＼なところがあるのですよ」

「母のことを口にしますと、すぐこうなのですか」

「母の顔を流れる涙を指先で押えながら、淋しそうに笑われる定美さんは今年二十六才になられる。

「ねえ潮花さん、人間で慎重に考えても軽率であっても、仕合せな運命にある人は生涯仕合せです。不幸なものには幾ら努力しても生涯不仕合せですわね。運命なんて自分が切り拓くもの様に言われますけど結果は運命ですね。そう思うことによつてすべての物に解決がつかさうです。此の後もすべてに努力して、すべてに不仕合せが来ましたら運命として諦めます」と言われる定美さんの運命論を耳の奥深くに残しながらお別れした。

次回は「仮名ばかり」の句をやつて頂きましよう。外国語、外来語、大和ことば、古語、片かな、平かな、何でもよろしいから出来るだけ漢字を避けて作つてみて下さい。仮名ばかりの句は漢字の刺激を避けて柔い情緒を出します。一年生の作品のように読みにくいものです。又一ふたつにおり

質疑に答える

清水白柳子

めぐびにまきつけるじゆず」の様に句切方如何ではとんでもない誤解も生じます。よく考えて作句してみて下さい。
研究題 「仮名ばかりの句」及雑吟
切 十月十五日
発表 十二月号予定
投稿先 豊中市本町三丁目二〇一 戸田 古方

▼類句に就きましては本社句会で路郎先生の柳話の中にもしばしばありました。最近、類句を時々川雑誌上又は支部句会で見受けますので、これはその作者よりも選者の眼をも少し広くして頂いていたら解決するのではないかと思ひますが如何で御座いますか？ 御説明を御願ひ申し上げます。 大阪・R・A生

類句に就いて

▼類句の問題は、作家経歴の如何に関わらず最も悩まされる事柄であります。大きく言つて人間生活が殆んど同じ様なコースをとつて居る限り、吾々としてもその域外である筈はありませんので、自然詠まれる事柄に差異の少いのは当然であります。ですからいきおい類句が生れ易いわけでありませぬ。

発表された類句に対して選者だ

ために採ることもあり得るので、そんな場合は大目に見て頂かねばなりません。と言つても、罰せつ又は模倣は、創作者としてとるべき態度ではない事は言うまでもありません。類句を避けるためには大胆に生活を掘り下げて行けば、その作者にだけしか詠まれない句が出来る筈です。

要するに、秀れた句は「いいのち」を持って居りますから後世に残り、その類句は自然に淘汰されて行きますから、ノイローゼにからないように、選者を信頼して作句される様に望みます。

▼不朽洞会の機構、規約を簡単に教へ下さい。

大阪・三木楨林

併し類句と言つても、同想の句、同型の句、テニヲハの連いだけの句と色々ありますが、優れた句は本誌にも連載されて居ります様に「新川柳鑑賞」等に採録されて後世に残る句となり、又は個人句集、その他の句集などで残されて行きますからあまり神経質になる必要はないと思ひます。

次に、支部句会等では類句と判つて居ても、その出席者の育成の

役員としては現在、理事長には北川春果氏が推薦され、副理事長二名、常任理事及理事によつて会務が運営されて居ります。

入会を御希望なさる方は、川柳雑誌社内「不朽洞会事務所」宛に御申込になるか、最寄の不朽洞会員に御相談下さいれば規約その他をお送りするようになつて居ります。

▼川柳を研鑽すべき方法を。

大阪・三木楨林

▼川柳の進歩の路は？

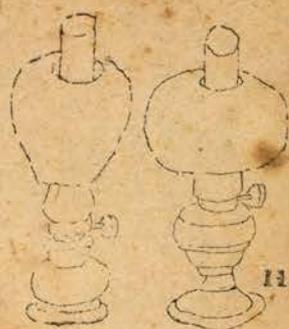
茨木・伊勢 登

▼川柳を研鑽するに一番よい方法は、師について直接指導を受けることとあります。川柳雑誌社不朽洞会はそうした方々のために広く門戸を開放して、路郎先生に直接指導を受ける途を開いて居るわけです。まだ御入会に及ばずそうした機会に恵まれない方のために、川柳雑誌社では各地に支部を置いて、不朽洞会員によって初心者への育成指導に當つて居ります。最寄りの支部なり、お近く不朽洞会員について添削を受けられるか、批評を聞かれる様にされるのがよいと思ひます。誌上では戸田古方氏が第二教室で懇切に指導されて居りますので、御得心のゆく迄研究されるのが良い方法であると存じます。

型があります。個性を出すべきや、カラーに和すべきや？
茨木・伊勢 登

▼川柳は創作芸術でありますから、茶道、華道、謡曲と言ふ様な再現芸術と違つて、何々流何々流という流派もありませんし又、文楽、歌舞伎のようにきまつた型もありません。川柳作家自身のカラーが即ち個性でありますから、どこ迄も自分の個性を生かすことに専念せねばなりません。たとえその柳誌に迎合した様な句が抜句されたとしても、その作者がいつかはその句に愛着を感じないようになり、いいのちのない句となつて行くでしょう。柳誌のカラーに和した句は所詮付焼刃にすぎないと思われまふ。自分と言ふものを深く掘り下げて、その人でなければ作れない個性のある句を詠むようにしなければ、川柳作家としての本當の姿ではありません。多説も結構ですが、色々迷わずに進まれることを希みます。

▼各柳誌の出句にはそれ／＼の
質問は川柳に関する限りどんなことでもよろしいが、一度答えた事には答えない。又、調査を要する様な問題はお答が多少遅れることを予め御承知置き願ひたい。御質問は「大阪市天王寺区宰相山町一四七・清水白柳子」宛。



権力と川柳

戸田古方

映画「修善寺物語」では綺堂の原作と違って人間劇家が大きく取扱われていました。あれなら外国人にも解るし、歴史を忘れかゝっている人たちにも納得出来ます。それがあの映画の長所でもあり、欠点でもあったのです。頼家の悲劇は頼朝の子に生れたからであり、將軍という位にいたからでありました。比企能員や仁田忠常に利用されたので殺されたのです。只の人になりたいたい、ながら、夜叉王に注文した面の出来が遅いといつては刀の柄に手をかけざるを得なかつたのです。頼家は権力という化物の犠牲になつたのでした。

権力は人を幸福にするかしないか。一般人即ち権力のないものにとつては迷惑な場合が多く、権力者自身もその人柄によるとはいふものゝ、権力をもつたがための不幸をかこたねばならない人が如何に多いことか。ナポレオンも秀吉もその例から洩れるものではあり

ません。本人にとつては悲劇でも、静かに眺めれば喜劇になつて、いる場合が多いのです。川柳のよき題材であり、人生批判、社会批判を可能にし、それを通してめいめいの人間陶冶の機会にもなり得るのです。

それは権力というものが適正に保ち得ないものだからです。すぐ濫用されるからです。人気、金、名譽そしてそれから得た力に翻れてしまふからです。

そもそも権力の「権」という字はそんなごう慢な気儘な意味はもつていないのです。いやむしろ正反對にその人自身を縛り、自重させるものなのですが、大抵そんなことはすつかり忘れていゝ氣になるのです。人間って大方そんなものなのです。川柳と権力という題でお喋りしようと思つたのもそんなところからなのです。

日光東照宮のことを「東照大権現」といゝますが、「権現」の意は「仮りに現れた」ということ

です。仏教が日本に伝わつてこれを扱ふようとした時、神道に擬つてゐる人々をこちらへ向かすために本地垂迹説が唱えられました。それはインドの仏さまが日本ではかりに神の姿を借りて現れたといふのです。神即仏といふわけで、神さまはみな仏さまの仮りの姿と考へたのです。明治以来神さまと仏さまは別々になりましたがそれまではごちゃ混ぜです。日光へ参りますと鳥居があるかと思つと鐘撞堂があつたり仏さまか神さまか解りません。お社の中に五重の塔があつたりするのは日光だけじゃありません。天王寺西門の石の鳥居もその一つ。

それから太宰権帥とか権大納言とかいふ役がありますがそれは次官という意味だし、お寺の奥さんを権妻といゝます。

まあそんな具合に「権」といふのは「仮」といふ意味で、万人の幸福を守り公安秩序を保つために指導者に「仮」に与えられた力が

権力という訳です。まあ、甘やかしては皆が迷惑します。権力を正しく使うことは大へん難しいのです。勿論それが解つていればボスになんかなれようがありません。

人間は弱いものだからすぐ自分の心に敗けて不当な力の使い方をして如何にも自分が強いように見せないと承知出来ません。

濫用監視の第一は自分に対して必要でしょう。次には他人からの批判ということになります。川柳は詩であり文学でありますが、功利的にいへばこゝろした監視の第一線の働きをするのです。

併しそらういふ監視は時の権力者にとつては不愉快極まるものですから、正しい批判は時々ひどい圧迫を受けねばなりませんでした。手近なところで、川柳雑誌の二三五号（昭和一八・八）は検閲にかゝつて四頁削除して発行されました。その四頁には

一寸だけ喋るに役人供を
れ 孤蓬
無駄足を踏まして府庁舞え
立ち 吐空
などの句があつたからです。拘束だけは免れましたが路郎先生に大へん御迷惑をおかけしたことを思い出します。

五世川柳、初代柄井八右衛門から五代目にあたる主宰者なんです、この人の時代に次のようなものが出ています。

- 御風式法
- 一、政事に係はりたる事は何事によらず句作撰みな致すまじき事
 - 二、近世の貴顕官員の実名など句中に取結びたる風調堅く引墨致すまじき事
 - 三、畏れある事は申すに及ばず、警ひ知己に候とも人名を顯はし、讒謗がましき句体は一切引墨致す間敷事
 - 四、博奕出火刑罰などの不吉がましき句作は一切禁忌たるべき事
 - 五、句撰の規則は天朝を尊敬し、敬神愛國を旨とし、昔の貴人、忠孝、道徳、五常の教導、技芸の名譽、奇特の句体

武田薬品

疲れをほし 体力をつくる

武田の綜合ビタミン剤

パンピタン

30錠・100錠 他に液・末・M・注

を尊み高番に据うべき事右は自然善行の道句案に浮み勸懲の一端にもなるべきが故也

六、句撰は決して依估これなく、風流專一に引墨すべき事

七、異年我が柳風に於ては聊か不將の者これなく候へども此後万一不法の輩有之候ては以の外の一大事の儀に付き此段精精注意し、是迄の規矩を崩さず柳風永続すべきやう心掛專一の事

八、開卷席上に於ても相済み候までは禁酒致し雑言の上争論無之様慎風雅を友と睦み交り、厚く人の基と申す大意を心得、幾久しく此道の繁榮となり候はゞ元祖柳翁への幸養風柳の功と相心得承知可致様大略書送り畢

月 日

狂言判者 五世川柳

この式法は一概に悪いとばかりはいえませんが、天保時代というから今から百年位前になります、その頃の柳界の様子も窺うことが出来て面白いですね。

天保といえは水野越前守の改革があつた時で幕府も落ち目、狂えるが如く強権にものをいわせていた時代で、五世川柳はじめその血流がおとなしく、それに屈従して

いきました。こうなつては案外です。社会批判も、人間向上もあつたもので

はありません。

風雪三十年、昭和の句が大正のそれに比べるとまだ、低調で、水準まで戻つていないと云われております。柳人よ、しつかりせよと叫ばずにおられませんか。

寸鉄人を刺すその小粒な型は他の芸術の型に微に入り細を穿つことは出来なくとも、それ以上にドキンと警鐘の働きを致します。

川柳が膝を屈するのは真理に對してのみです。自然の環境、民族の伝統はその方向を示してくれるでしょう。徳球告別式の記事の中に焼香云々のことがあり不思議な気がしましたが、彼も亦日本人の一人であつたのです。

この間、子供の「少年クラブ」の中に「空飛ぶ戦艦」というのがありました。太刀打の出来ない強力な武器が戦争を断念させるといふテーマです。「戦略空軍命令」というアメリカ映画をこれも子供に誘われて見ましたが狙いは同じ力の平和ということでした。

力の平和は力の及ぶ間だけのこと、不安は去りません。バランスが破れたらお終いです。オネスト・ジョンやB49が来るといふ

ます。所詮は人間の欲望の続く限り続く不安です。欲望の根本的精算はたとえ理想であらうとも画餅にしないよう川柳人の絶望してはなら

ないテーマだと思つたのです。

権力者は手の届かないような高い所に居り勝ちです。しかし彼の耳にも我々の鳴らす鐘や太鼓の音は聞える筈です。その手を休めてはなりません。と共に一人一人が内省して、自らの内にある怒の根絶やしへの努力を続けて行くこと、たとえその一歩は小さくとも、ほんとの文化国家、文化世界建設のための念願ではないでしょうか。

川柳は楽しいからつくる、それでよろしい。川柳は幸福になるためにつくる、それは更によろしい。その幸福こそは争わんとする心を蕪痺させるのではなく、争い得ない心を再生せしめ得るのであります。そこまで川柳をもつて行きたいと思つています。

丁度今朝の新聞に「花の生涯」でお馴染みの大老井伊直弼の「近世直弼文書」四十冊が世に出る記事が出ていました。彦根の井伊家に伝わる井伊家文書三十万点の資料から編さんされたもので、これによると今までの幕末史がすっかり書き変えられなければならないかなりそうです。誰がそんな過まつた歴史を書いたか、書かせたか、それは明治初年に巾をかかせていた薩長閥だということです。

権力ほど世を過まつものはないことを今また一つ身近に発見して、今更の如く権力の正しい適正な行使の難しさを感じるのです。

大阪市民文化祭 第七回大阪市民川柳大会

日時 昭和三十年十一月十三日(日) 十時開場
会場 毎日新聞社講堂(三階)

司会

西尾 栗(川柳雜誌社)
北川 春葉(川柳雜誌社)
大 阪 市

開会の辞

映 画 「息子の青春上映」

休 憩 (風食及席題作句)

講 演 「題未定」

兼 題 「台所」

同 「親切」

同 「ペン」

講 演 「明治四十二年」

兼 題 「風呂屋風景」

同 「癖」

同 「都会」

講 演 「俗生活に及ぼす川柳の力」

兼 題 「映画(息子の青春)を見て」

閉会の辞

呈 賞 大阪市長賞並に教委賞其他(出席者優先)

兼題投句用紙官製はがき一枚に付き一題二句宛

締 切 十月三十一日着便のこと

投句先 大阪市北区中之島・大阪市教育委員会社会教育課内

市民川柳大会係宛

大 阪 市
共 催 大阪市教育委員会
後 援 大阪川柳連盟
毎日新聞社

一路集

噂

松江梅里選

仰山な噂をまいて二人逃げ 富士子
 解散の噂ばかりで草疲れる 芳 仙
 噂の主とも見えぬあどけなさ 孝 平
 噂など気にしなさんなと気がかり 与 呂 志
 金貯めた噂に癖が高うなり 雄 々
 疑えば噂に思ひあたること 牧 人
 税務署は儲けた噂ばかり聞き 瀧 秋
 噂の娘噂どおりに戻って来 三 林 坊
 噂にしては金貸成りたゝず 井 蛙
 スタジオで噂の立つ頃別れて居 一 三 夫
 噂とは別に悲恋のあるスター 玉 兎
 転勤の噂に借り手今日も来た 静 観 堂
 噂はあがらぬと噂見され 不 二
 二人して噂へ手段講じて居 五 茶
 そんな噂俺が知るかと不貞腐れ 五 茶
 噂には勝てず還俗した尼僧 晃 康
 お噂をして居りました猪口が来る 藤 史 郎
 噂では遣り手頭の低い人 悠 介
 戸が立たぬ噂ラジオの様に聞け 徹 醉
 鹹きりの噂労組が否定する 圭 水
 どうせ七十五日の噂だ笑つとく 淡 舟
 噂する女を噂する女 松 太
 噂では小金を貯めてることとされ 春 也
 中共の噂は嘘も蚊もいない 雄 声

噂など馬耳東風と熱をあけ 万 古
 よう云わうよ云わうと噂の娘 晶 平
 気がもめる女についている噂 大 然
 刑事ふと街の噂へ付ちどまり 一 恒
 噂へ気をとられお酒酌きこぼし 代 仕 男
 スランプへ早や引退の噂立ち 幸
 友情は噂を聞いただけで来る 木 魚
 噂など気にせずやれと励まされ 正 郎
 噂からほんとなつて来た二人 黒 天 子
 小金ある噂雨戸を堅く閉め 天 邪 鬼
 かしましき噂を消した遠花火 香 林
 噂もう浮名の域を通り越し 恵 二 朗
 水打ったホームへ噂の人が降り 良 坊
 横恋慕噂に負けて諦める 十 九 平
 御近所の噂に上る洗濯機 立 児
 生きてゆく強さ噂に逆らわず 葉 光
 床屋から選挙違反を聞いてくる 春 日
 みめうるわし、噂の渦取り巻かれ 七 面 山
 汚職だと人の噂の家が建ち 光 郎
 噂とは違ふ景気の良い便り 草 一 郎
 噂しているの裸あけられず 貴 通
 噂々バチ／＼枯木のように燃え 同
 百万も遣したなど、噂され 同
 噂とは別な生活をする二号 同
 また一人増えて噂に輪がかゝり 藤 波
 お噂はしても無沙汰、謝し手紙 同
 高連で走る根も葉もない噂 十 悟
 その噂近所の閑が持ち歩き 同
 噂の口止をされた噂は忘れとき 有 子
 噂ももう左遷の椅子を決めて居 一 太
 (佳)あんまりな噂に口も塞がらず 好 日
 (佳)噂など歯牙にもかけぬ吐が出来 千 容
 (佳)い噂扇子の風に送られる 保 夫

(佳)噂立てられてるうちが花なのよ 恵 二 朗
 (佳)頼まれぬ噂を消して酒うまし 香 林
 (佳)聞き流す噂生活に追われる身 葉 光
 (佳)袖を引きあごで噂の人をさし 立 児
 (佳)敵切りの噂の中に僕が居た 夜 潮
 (人)切恋へ罪な噂は消してやり 春 日
 (地)おしりに出してお噂してたよ 楢 林
 (天)美人秘書噂の中にツンと生き 七 面 山
 (輔)仏心を捨て、噂の突を結ぶ 同

支拂

小川恒明選

支払日給麗どころが押しかける 芳 人
 支払わぬ客へも同じ笑顔なり 桃 仙 坊
 支払になつて分つた使い込み 実 信
 支払がきれいにすんだ日の茶漬 明 雄
 支払日社長朝から見えまへん 良 坊
 支払のきたないことは親ゆすり 千 容
 支払へ仲居財布の中を窺み 幸 平
 あたしに支払わせてと惚れる者 恵 二 朗
 支払へ心づもりのスクーター 葉 光
 支払のことから隠しごとがばれ 十 悟
 支払の小切手拙いサインする 一 三 夫
 支払の窓口苦手の顔に会い 一 机
 支払の終る頃から飽きて来る 保 夫
 支払つてくれとマダムだから云え 雄 々
 はつたりがばれた今夜の支払日 与 呂 志
 料理屋の支払だけは夫行き 富 士 子
 許す気の勘定男に任せとき 花 団 子
 お役所の支払訊問調となり 春 日
 支払の窓は時間を勵行し 井 蛙
 (天)支払もせず宝くじばかり買 木 魚

會計課社長の判へすぐ払い 立 児
 支払の気持のよさが生んだ恋 藤 司
 支払が方々たまる水枕 静 観 堂
 支払つて呉れてチクリと刺す言葉 太 路
 支払日忘れずに来る洋服屋 玉 視
 支払のたしかな店をまず廻り 晃 康
 喉阿だけ切つて支払せずに行き 同
 支払の済まぬ店先道を替え 隆 文
 支払はもう時間です暮を囲み 不 二
 男が払うものよと悪びれず 麗 氣 楼
 洋装で来て見違えた支払日 楢 林
 支払を済ませた足で又も飲み 雄 声
 チップだけ払い飲代掛にされ 元 雄
 女将まだ支払う事に触れず酌ぎ 代 仕 男
 はれている弱身勘定払わされ 幸
 支払の目を間違えて怒鳴られる 正 郎
 支払つて呉れずせの札だった 越 山
 支払つてくれぬ家にも案内状 好 日
 たこ焼屋千円札にちと慌て 圭 水
 金詰り支払う方が恩にきせ 万 古
 医者の方だけ支払のばしとき 七 面 山
 贈賄にならないように支払し 十 九 平
 ティンエージ支払別にして帰り 十 九 平
 親馬鹿になつて支払して廻り 十 九 平
 支払日やれ／＼と云うビール抜く 十 九 平
 文化生活月賦屋に追われつゝ 香 林
 支払をするで電話で呼びつける 香 林
 社宅きょう同じ理由で貰われず 玉 兎
 借り倒す腹もすことは持つて居た 玉 兎
 女房にないしよですよと云う払い 玉 兎
 (人)遍路さんの払一円札ばかり 芳 仙
 (地)支払は日曜にして共稼ぎ 芳 仙
 (天)支払もせず宝くじばかり買 芳 仙

いのある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
臨▼開催月日及場所記入▼締
切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社八月句會 (大阪市)

八月六日 午後六時
於 光明寺

追想するさえ恐しい原爆の日から十年、当夜の光明寺の句會は各人の人生、十年の回顧、思ひ出又新なものがあつた。開會に繞いて、過般逝去した本社副主幹福田山雨樓氏に黙禱を捧げ、続いて古方氏の柳話原爆の日に因んで、権利・権力について述べ、十八年八月号の本誌句を引例しながら終戦後の世相の変遷を語り、日本伝統の川柳のよさを今後再び侵害するような世にせぬようと結び、白柳氏の句評は、八月号から文語体の句に短評を加え作句の注意を喚起された。後、席・兼題の披露に移り、路郎師遺不朽洞杯は師のお差支のため争奪は行わず、待望の霞乃女史句集を頒ち、午後九時半閉會。

出席者 一三夫・古竹・喜好・好郎・清潮・二朗・六童子・文秋・文武洞・雄声・摩太郎・紫香・いさむ・ひろし・葉光・保夫・静馬・茶仏・言也・夢人・須賀太・多久志・凡九郎・花香・白柳子・一榮・

梅志・清子・玲人・没食子・宍歩・狂三・雪山・淡舟・白水・貴山・梅里・香林・博也・十悟・与呂志・水茶・黒天子・古方・牧人・恒明・素男・竜太郎・へとち・潮花・梨里・霞乃

兼題「相談」 市場没食子選

相談へ乗つて呉れたは他人様 一榮
こつそりと相談された遊姫業 多久志
相談の末二人目も生むときめ 博也
相談は相談として酒をのみ 竜太郎
相談に乗るけど金はよう出さん 白水
相談に来親戚も金詰り 喜好
金借りる相談友にもちかける 季賀
相談の妓へ頼りなく酔っている 言也
相談に来て相談をされて去に 初甫
相談があると別間へ連れてゆき 言也
相談があると扇子で上を指し 梅志
席次みて父と母とが相談し まさひろ
相談は極秘ねずみやがましい 博也
相談をしておきますと迷する密附 梅里
相談をしたのか寄附帖同じ類 いさむ
相談に金の無いのが乗つてくれ 喜好
相談をしてお見合の返事が来 都詩子
相談が人事に触れて小声なり 文武洞
四捨五入する相談にみんな寄り 貴山
先輩に相談されて気がつまり 淡舟
相談はもう密談となり夜が更ける 黒天子
進物相談所等と商策抜目なし 宍歩
八百長の相談棚が巾をととり 白柳子
相談棚ウソもつり混せて書き 都詩子
相談棚答は読者向きに書き 宍歩
あつさり相談棚は別れさせ 牧人
おはなしがうんかお手のなる座敷 古方
下ッ端が来た相談を鼻で聴く 梅志

永い事相談安い方を買ひ 夢人
送話器を押えて何やら相談し 花香
内密に相談したい耳をかり 須賀太
隠居したのに相談を持ちこまれ 同
極秘と云う相談耳に口をあて 没食子

兼題「アクセサリー」 川村好郎選

アクセサリーお灸のあとが邪魔になり 梅志
アクセサリー丈置められていて不満 凡九郎
アクセサリー折角のモード殺しとり へとち
不景気のあつまるマダムのアクセサリー 喜好
アクセサリーのつもりで妻を連れ歩き 没食子
アクセサリーの髭がもの云う処方箋 梅里
アクセサリーの眼を射る型のアクセサリー 都詩子
アクセサリーの真偽は知らずよく光り 玲人
アクセサリーにされるお供をうれしがり 言也
アクセサリーとは不自由な背ボタン 牧人
時間とは別にアクセサリーの時計持ち 玄武洞
大学生本をもつのもアクセサリー 聖柳子
もみちやの中に引き立つアクセサリー まさひろ
さうせもうアクセサリーですわいと女拗ね 茶仏
夕刊はしがない僕のアクセサリー 没食子
アクセサリーなしの娘に気がのこり 一三夫
アクセサリーいっせ悲惨な低い鼻 喜好
敬歩するアクセサリーと女気がつかず 好郎
兼題「日やけ」 友淵貴山選
日やけした顔が揃うたきつね拳 聖柳子
日やけの子浪の高さを説明し 花香
日やけなど忘れて見入る予想表 竜太郎
日やけした腕でもりくサインする 梅志
日やけは日やけ白粉はなんぞつけ 白柳子
女子選手やっはり日やけ止めは塗り 没食子
日やけした腕も見せとく得意先 博也
日やけした顔へやめとこイヤリング 初甫

子の日やけ父はデフレの蒼い顔 雄声
職業が判る日やけの父を持ち 香林
これ丈の器量で日やけ気にかかり 素男
日やけしてちよつと男の顔らしく 博也
案の定噂の二人日やけして 喜好
ドタバタ又々日やけ吸いこんだ 清潮
今年から日やけの厭がる娘さ変り 夢人
日やけした娘盛りを持ってあまし 水茶
前歴は云わず日やけのバタ車 六童子
百舌の舌きくのに日やけまだこれや 梅志
日やけした顔をベツトから見つめ 玲人
厚顔の君もやっはり日やけかい 素男
転動させてからこんな日やけする 保夫
日やけした顔が西瓜をかぶりつき 言也
アルバイト知性殺している日やけ 好郎
女手で生きる日やけをためられず 牧人
情けない日給日やけの皮膚がむけ 没食子
御見舞に日やけの顔は隅へ寄り 貴山

兼題「宿題」 後藤梅志選

宿題へ親がテストをされるよう 花香
宿題へ寺子屋の様な子沢山 初甫
宿題がすむとお八つをひつたり 文秋
宿題と兄ありトンボ捕りに行き 葉光
宿題は親がやったと勘に来る 須賀太
宿題へ祭囃子が近くなり 玲人
女専出の母へ宿題まかしとき 初甫
宿題の数字が合わぬ父と母 玲人
宿題が蚊帳から首を出して居り 一朗
宿題を出さぬ先生で人気あり 博也
宿題の三角だけは兄が解き 宍歩
宿題の英語は父も苦手なり 玄武洞
豆スター宿題ボンと投げたまゝ 淡舟
宿題の手工へ父の手を借りる いさむ

宿題の灯がまだ消えず母も寝ず 牧人
 宿題へ母は昔の字で教え 保夫
 宿題の子がナイターへ囀りつき 茶仏
 宿題を素直にすればいいらしく 白柳子
 宿題の掌が血ふくれた蚊を叩き 言也
 宿題は女中が一番早く解き 一三夫
 宿題へ父は時代のずれを知り 好郎
 宿題を母は縫うてる横でさせ 没食子
 宿題へたゞブン／＼と手内職 好郎
 宿題へ母も子供になつてやり 黒天子
 子煩悩らしく宿題目を通し 与呂志
 宿題の口は設計がえになり 梅志

席題「太鼓判」 武部香林選

太鼓判夫れが不渡りにならうと へとち
 太鼓判押した手形がまだ落ちず 茶仏
 合格は太鼓判だと元気づけ 淡舟
 太鼓判捺したに二号あるのばれ 白水
 につこりと太鼓判押す聴診器 いさむ
 太鼓判捺された手前辛抱し 白水
 太鼓判押したおやじが中毒し 喜好
 結局は貰うときめた太鼓判 博也
 太鼓判押してくれたに断わられ 狂二
 太鼓判押すは元はうちのもの 白柳子
 太鼓判押され手術をするときめ 夢人
 太鼓判だよとビールで前祝 淡舟
 太鼓判信ずる十字切つてみる 貴山
 太鼓判押しては西瓜たゝいてみ 冗歩
 太鼓判押す人もなくバタ車 六竜子
 太鼓判ありやちや解散してしま 古方
 損したら引受けますと太鼓判 白柳子
 太鼓判押した課長が連れ歩き 清潮
 勵まして自信を持たず太鼓判 葉光
 大臣になるぞと司書の太鼓判 香林

席題「本職」 松江梅里選

本職もはだし旦那とほめておき 喜好
 結局は損本職へまたもどり 好郎
 本職と別に楽しい趣味をもち 清子
 いつの間か本職を辞めていた 凡九郎
 本職は赤字かせぎは別に持ち 冗歩
 本職がさわわからぬ趣味に生き 葉光
 本職を話せば堅いことばかり 紫香
 本職も買う金融の処分品 文秋
 本職は知らず儲けるのは確か 保夫
 横好きの趣味へ本職そちのけ 十悟
 有名になつて本職まごつかせ 古方
 本職を持たずナイター乗り廻し 一三夫
 本職は寿司屋だんねと永かき 香林
 本職でないとは熱が足らぬなり 雄声
 本職が見かねて一肌脱いでくれ いさむ
 本職を知らないままの飲み仲間 葉光
 本職はスリ現金がまわるはず 白柳子
 本職を年甲斐もなく嘘をつき 奄太郎
 本職が本職らしくよく喋り 博也
 本職はこんなとこまで気をつかい 古方
 本職におだてられてる旦那芸 葉光
 本職で食えぬ原稿書きつとけ 言也
 本職の外にゲストで名を高め へとち
 本職の方は名前が売れていず 茶仏
 本職をちよい／＼休む儲け口 紫香
 税務署へ本職だけの顔でゆき 好郎
 本職が持ては雑作のないうなぎ 牧人
 本職に触れると話題すぐにかえ 梅里

席題「釣り」

黒川紫香選

釣り自慢うまを合せて酌いでやり 葉光
 撒き餌したとこでよきん又も釣り 貴山
 あなごつり約手思うまい思うまい 好郎

処かまでよめる沙魚に昏れかゝり 玄武洞
 釣道具だけは誰にも負けていず 須賀太
 釣りをしているのが気をつかい 水茶
 気短の父で魚釣り得意なり 素男
 ナイターの灯を背にして夜釣りに来 へとち
 妻連れ釣りに池さつぱり釣れぬなり 与呂志
 釣りの本買うて来てまで研究し 一三夫
 暑中休暇釣りで一日つぶしたり 淡舟
 気の合うた釣友達は元大佐 多久志
 沖釣りの位置を船頭心得る 言也
 釣り舟が一艘戻らぬ時化の朝 いさむ
 買うた方が安い魚を釣ってくる 一朗
 今日雨でねと釣りの愚痴 奄太郎
 気がぬれ場所どころ釣りつとけ 言也
 電車を降りて釣り場所を教えられ 白柳子
 顔見れば釣りの話を聞かされる 雪山
 弁当を喰べてる間につれていた 博也
 釣れそうなのは先客魚籠をうけ 紫香

席題「子供連れ」

新川博也選

子供連れ子供の数だけラムネ飲み 保夫
 子供連れメニューの書きひまが要り 白柳子
 信号に慌てゝ走る子供連れ 淡舟
 子供連れ娘の良さをほめられる 言也
 子供連れ同志の芝生へ蜻蛉来る 紫香
 門口で失礼をする子供連れ 同
 子供が坐れる場所をたのみこみ 須賀太
 子を連れて再婚をする腹をきめ ひろし
 子供連れの方に殿下が話しかけ 喜好
 子供連れだけは御飯を出しておき 茶仏
 子供連れリースカーに決めて居り 淡舟
 子供連れキリキリ舞をして戻り 貴山
 子供連れ小人一人追加され 白水
 つかみ合いを遠く見ている子供連れ 玲人
 橋筋を肩馬で行く子供煩悩 狂二

淀川支部句会 (大阪市)

八月九日

於香林居 武部香林報

ピニールの袋で金魚旅をする 保夫
 金魚鉢置いて二号に趣味もなく 香林
 肥車ネオンの残る朝を行き 野甫
 退院の朝の散葉まき散らし 凡太郎
 女客裸の主人あわてさせ 文平
 裸でと言つた結婚貨車仕立 潮風
 負け将棋やけにぼん／＼蚊を叩き 東洋男
 別荘の午睡蚊蚊に起こされる 若菜
 人間の方が逃げたい程いぶし 花村
 蚊を叩き／＼王将退陣す 堯中

堺支部句会 (堺市)

八月十九日

於摩天郎居 八木摩天郎報

下心上司の趣味に逆らわず 圭水
 下心あると睨んだ妻の酌 一葉
 こゝまでは他人の智恵の下心 圭水
 下心見抜いて女また無心 好郎
 下心あるとは見せぬ都会馴れ 梨里
 早起きをして新聞の遅いこと 春翠
 早起きの丁稚の癖がまだ抜けず 摩天郎
 父ちゃん寝るさ云う怪談のもの 雄声

二枚目がもう脇役へ廻る哉 狂二
脇役へ廻り人氣がまだ続き 素男
脇役の哀れ触つただけで死に 雪山
殺されに出る脇役も白う塗り 貴山

川 京都支部句会 (京都市)

八月十六日 於 仲源寺 田中鳥雀報

レコードで小供音頭の輪も楽し 九角
音頭アレンジしてジャバニース・マンボ ゆきさら
お手軽るの腰掛徳利並びかけ 紫蘭
仕上工今日邪念に抄らず 喜由
石仏の仕上へノミは軽い音 光二郎
人間に仕上げてやろうとは過言 龜一
人混みの足足足に犬疲れ 鳥雀
人混みを少し避けた螢売り 晴芽
環境の禍いつか罪作る 親生

川 篠山支部句会 (兵庫県)

八月七日 於 関電寮 小西無鬼報

ウチ死んでやるりと娘やけつくそ 無聖
やけくそで飛んでは出たが当てもなく 鈴江
やけくそをぐつとこらえたお題目 富士子
一寸したやけがもとよと赤い爪 洋牛
女房のやけくそ甘いものですみ 日竿
失態で覚えた下戸のやけ酒だ 枝葉
やけくそその我子へ母として案じ 越山
手入れせぬ庭を家主が見て帰り 民子
年一度手入れの風に晴着舞う 小菊
植木屋の手入れへ蔭のない真風 文子
造作の手入れ目出度い日へ急ぎ 白猫児
石段を昇って神を素通りし 雀子
待たしてゐる氣持が石段二段とび 千枝子

七五三石段中途で写される 秋峰
失恋の痛手石段きつう見え 喜天
胸つきの石段一ト先ず目で上り ただし
石段もやっぱり遅いババとママ 左文字
石段をよろく上るハイヒール 洋牛
石段の下から無理な願ひ事 ひか平
石段のまだく奥が頼む神 初穂
石段の高さ氣にせぬ月詣り 無鬼

川 篠山電々グループ句会 (篠山電々寮)

於 篠山電々寮 前川左文字報

ハハキトク次の電報来るな来な 勳
安着は既に車中で打っておき 美津子
電報の一字削るに骨を折り 精一
伝言板電報の様なのが並び 日竿
祝電へ乾杯も一度重ねられ 鈴江
四月馬鹿電報までも疑われ 千枝子
祝電の中に新町長の笑顔あり 敏夫
居りますと言うて困つた電話口 保男
送話口塞ぎ課長へ念を押し 左文字
新社員受話器取ろうか取るまいか 保男
電話では秘語アレで通じさし 拳坊
女事務笑つただけで電話切り 一風
突然にかかった電話声が出ず 房江

川 出雲支部句会 (出雲市)

八月十七日 於 教育委員会 竹原雲平報

行水の娘は猫の目も怖れ 雲平
金魚は裸生きてるガラスビン 緑之助
倅な風寝突内は皆裸 重信
素裸になつて故郷の膳につき 芳風
生活の自信火花へかける夢 岬月

沈黙は金なり丸く生きており 芳風
沈黙の肩をゆすれば涙ぐみ 壯
沈黙の女意外な決意する 勉

川 大聖寺支部句会 (石川県)

八月二十日 於 寿子居 野村味平報

故郷に近い車窓の国訛り 武富
久々に来た小包に里思ふ 寿子
総領の浮名土台がゆるぎ出し 桃園
久し振りの雨だった大根にも 味平
なつかしの話へいっかお茶が冷え 桃園
供出米一番乗へ写真班とよ 魯木
俄雨青春らしい軋けつぶり 魯木
椅子席を帽子に留守番さして立ち 一恒
浮氣する氣は行先をちと濁し 雅子
泣きの手に男は敗て無理を聞き 明石

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

八月十四日 於 第四福田小学校 田垣方大報

泳がない者は荷物の監視役 峰豊
湯しぶきへまた番台が怒鳴ると来 春也
沖へ行く子へ親の目は追うて行き 明心
浮袋社長は泳げないと見え 飴ン坊
明日は海豊に泳ぐこの騒ぎ 清子
学園にものをいわせてよく泳ぎ 千容
釣針へ掛けて暫く泳がされ 龜庵
泳ぐ子へもう届かない母の声 鯉風
しおれたを押花にする恋楽し 万古
呼出しの電話へ社長打ちしおれ 広志
掴まれた証拠しおれる外はなく 麗水
強引なところが社長お氣に召し 晴生
強引に金々々と取立てる 吞張

強引な管だ蔭から糸を引く 可笑
強引にとんだ桂馬が歩履食われ 春也
強引にやれく税務署長指揮 春日
強引に馴れてか母の折れ上手 承平
強引な方よとすでに許して居 まり子
産氣づく汽車ホームから担架かけ 吞舟
詰将棋急場を助言で盛り返し 素夫
村医者も事故の急場へ狩り出され 雲峰
急停車責務全うして眩み 斜木
夕立へ急場をしのぐ軒に立ち 笑雷
暮敵に急場をしのぐ金を借り 一善
急場とも知らずドモリは話しかけ 方大
あの急場救うた諸をもう忘れ 酔泉
正直な男急場へ嘘が出ず 春也
居直る氣肌のモンく一寸見せ 彌次郎
行水の肌夕顔に負けず浮き 泥魚
絹豆腐美人の肌を思わせる 流風
ビヤホール肌もれ合う午後六時 十九一
まだ若い肌惜しまれて居る喪服 桂月
灯をあびる自慢のノドは鐘一つ 凡一路
フラッシュへ新婦今日か悪ひれず 三六
灯を浴びて一層寂しい小糠雨 聴牌
パトロールのライト濡場を慌てさせ 糸柳
半分を半分に分ける子に育て 達也
半分の入りに芝居がちとだらけ 五茶
借金で半分払えた手内職 耕水
半分は妻がへそくり出して済み 谷水
十代の恋怖え怖え逢い 越鳥
おい君と肩叩かれてドキッとし 流風
掛将棋立見の服へドキンとし 吞張
怖えずにマンボスタイルのし歩き 狂風
新聞の記事に怖える一軒屋 千代春
上役に怖え家では妻に怖え 千古

スリラーを聴く雨戸固く閉め 愁水
仰山に怖え彼氏の腕をとり 素身郎
暈しいライバルの押に怖えとてり 一念
物影に怪談めいた夜を怖え 秀魁
善人の借金足音にも怖え 桂月
警官の感が怖えを見逃さず 方太

下関支部句会 (下関市)

八月七日 於 武久海水浴場

石川侃流洞報

晩酌に追加の欲しい唄が出る 呑氣坊
二、三步になって吊橋走り出し 柳慶
悲しみの涙夫は見てくれず 伊三男
ノド目慢音痴というも桁外れ 戊理智
泣いている給仕へ女事務も泣き 司楼
三味を弾く方も困っている音痴 九呂平
吊橋のスリル長蛇の列となり 半休
末席の音痴はもつぱら喰らひかり 久仁男
聞くだけが好きな音痴逃げ 同
子供連れ吊橋眺めただけで去に 同
偽りの涙も女心得て 光堂
爆笑の中に音痴の鐘が鳴り 蘇人
同情も意地も涙になる女 藤四郎
吊橋を渡つて後を振り返り 同
千載一遇社長の音痴へ湧く拍手 侃流洞
女嫌いな魚にもた夢を見た 呂久平
三つとも歌う音痴へ鳴る拍手 十字星
吊橋を渡つて見せて彼女呼び 同
酒の席音痴のババをママが受け 土籠坊
小心の吊橋途中から帰り 同
九い背が急ぐ吊橋寒そらな かつたる
芝居だとは女の涙凶々しい 千里
涼台音痴の妻が兎に教う 古子郎
聞き役に廻つて音痴静かなり みつる

退院を母は涙のまゝ迎え はなみ
川 弓削支部句会 (岡山県)

七月九日 於 梶谷医院

浜野奇童報

百姓が田植見てゆく三等車 緑翠園
網棚がまだくほしい三等車 花子
三等で夫婦十年ぶりの旅 京彌
三等車からも鞆が先に出る 旭童
三等車なるほど人の多い国 百郎
三等車子連れ子連れへ気が屈き 竹涼
三等車駈落らしい者ものり 桃々
地下足袋は僕だけじゃない三等車 祝郎
どの親も親しみ易い三等車 螢舟
ニューロツクがフツツました三等車 貞子
ハネムーン帰りは三等車で甘え 有子
旅楽し楽し三等車が騒ぎ 柏雨
行商も手伝わされる雨が降り 風流児
行商のもうまかりまへんたためより 孝女
遠慮もせずに気楽な三等車 竹葉
だらしく眠っているも三等車 みどり
イヤリング置集めた三等車 一風
人生の縮図のような三等車 磯千鳥
女学生の笑いにゆれる三等車 寿美江
旧友は二等へ僕は三等車 弓削平
三等車やっぱりに僕に似合う旅 美舟
ザーマスも矢張張つてる三等車 史郎
隣席の声が気になる三等車 奇童
三等車子供が皆を笑わせる 玉硯
三等へ乗って良かった話連れ 寿人
三等車旅は道づれよく喋り 和子
三等車やれく二等のようにすき 一喜
かつぎ屋の気持もわかる三等車 只世
三等車化粧くずれが眠りこけ 文琳

先生が乗って静かな三等車 実穂
不意打ちのつもりで来れば貸家札 一喜
貸家札金があつたらなと思ひ 早苗
貸家札貼つて噂の種を蒔き 寿人
貸家まで仲人世話をやいてくれ 川千鳥
柿の木も一本つけて貸家にし 七面山
豪勢な邸借り手もない貸家 喜楽
貸家札貼つて二代目哀れなり 春山
スイートホーム作る貸家が見当 今昌平
萬の葉のどこまで伸びる貸家札 静人
半分仕切り貸家のビラを貼り 壬
にわか雨傘は貸家の軒をかり 祐天
榮転へ洋間もついた家が借れ 文郎
後任へ貸家の世話もして渡し 巷雨
産制をといて女医さん子沢山 正平
二日酔皮肉交りて看護され 雪花
小姑の皮肉になれて子を寝かし 游子
言勝つてみたが淋しい雨の夜 鳴子
雨の夜出て行く猫も恋らしい 四郎
帰したくない夜しのつく雨さなり 古心
宿題を淋しくさせた雨の夜 手留雪
もう逢えぬ雨の港の灯がうるみ 柳生
道連が出来て不安な雨の夜 美香
あてにきて来て見た貸家もう借られ 水
とつちめてより行商二度来ず 牛歩
行商の母を見送る泣かない子 柳生
雨の夜暮でも打つかと電話が来 養流
朝帰り夕の雨が罪をさる 只世
口笛が届いてくれぬ雨の夜 とも子
旅の子がやたら気になる雨の夜 矢須子
きつと来てくれると思ふ雨の夜 弓削平
これが恋なのかせつない雨の夜 千年
金のない生活へ皮肉よく応え 牛歩
養生をしるとつれなく誠にされ 紅笑

備前支部句会 (岡山県)

八月二十七日 於 戯句案居

浜田久米雄報

サイピスに呉れた粗品を忘れて来 東岸子
配達車粗品の包山と積み 三晃
粗品でも忘れぬ義理を喜ばれ 娛句案
片言で持つて来さした煙草盆 吉美
片言がうっかり聞けぬことをい 三六
片言を母が訳して笑わせる 青樹
片言が通夜の席を皆泣かせ 泣虫
二階借りして新婚の落ちつけ 半仙
河豚料理あとは野となれ山となれ 柳風子

貴生川支部句会 (滋賀県)

六月四日 於 夢生居

黄瀬美秋報

用心より見栄の手伝う秋田犬 綾子
銅犬にかまれて通うベニシリン 美秋
初旅の一団ビルにも登つてみ 魚吉
ビルライクだんくお城も小さうなり 夢生
銀婚式未だ庭のない家に住み 木人
退院は庭の雑草から叱り 春菓
投票のエラー今頃デフレ来る 斗志

川 木次支部句会 (島根県)

八月六日

於 小学校 藤井明朗報

割勘へ帽子が盪廻しされ 広 沢
日曜の盪忙しい共稼ぎ 綾 美
夕月を盪へ受けて子をあやし 浮 生
自家用車社長の遊ぶバーが知れ 遠 所
赤線の基地に流れる自家用車 詩 朗
刑務所の前でとまった自家用車 明 暗
火の車やと自家用洗われる 俊 明
横丁の区劃整理へ市長が来 明 暗
人声を避けた横丁で犬が吠え 清 夢
横丁へ抜けるつもりが見つけられ 十 宝
総代は横丁曲った奥の奥 耕 文 宇
横丁は向うのラジオで時間きき 鶏 声
氣に入らぬお布施似合いの経を上げ 清 夢

川 宇部支部句会 (宇部市)

八月十三日 於 宇部市東岐波山陽荘

国弘半休報

食慾を母が驚く快復期 雪 峰
新薬が効いたか派手を喰いつぶり 午 豊
快復期試歩へ嬉しい肩をかし 青 水
快復期プランク戻すプラン樹て 丸 平
ロマンスをそつと包んで退院し 呆 鴨
往診の鞆眼を射る快復期 笹 舟
我まゝもぐちも出てくる快復期 平 田
この日だけ花火の側の二階欲し 豊 年
花火見に事寄せ脱糶するつもり 室 元
留守番が独りでほめる遠花火 半 休
長女もう父と母との仲をもち 天 作
中立は觀光国として平和 千 里
中立の発言皆から認められ 峰 松

若い頃写した君は色変り 末 岡
かけ出しのアッチュアード撮りたがり 和 田
アルバムへ子の生長が刻まれる 戊 理 智
借物のカメラとは彼女気が付かず 六 花

川 赤坂支部句会 (岡山県)

八月十四日

於 愛生園 政田大介報

税務吏と債鬼と保険波状で来 冬 扇
旗の波死んで帰れと囁を云い 十 四 坊
吹く煙波の上にもある浮世 秋 夫
涼みに出涼みの人に採まれて来 水 吞
涼台夕顔の花暮れ残り 米 豊 年
夕涼み昨夜の顔がみな揃い 宇 柳
朝の庭ゆうべと同じ虫が鳴き 舟 楽
朝までは帰す気でない蚊帳を吊り 一 久
職安の朝を励し合うモンペ 茂 人
待たされた拳句代理が来て坐り 大 介

川 大原支部句会 (岡山県)

八月十日

於 ゆたか居 本田恵二朗報

アルバムの母の若さをおかしがり 恵 二 朗
アルバムの父の晩年引伸ばし 十 坊
アルバムをバラツきあつた気を見られ ゆたか
アルバムの俺ははれかか新妻へ見せ 坊 太 郎
B1の穀積上げて夏を瘦せ 秋 芳
夏瘦も程々あつて美しく 麦 穂 子
出戻りを義母は自由にして置き 凡 平
泣く声も気兼ねを知つた間借の子 絹 女
気兼ねなく食えよと里のおはぎ餅 白 梅
忘れ物小包にして届けられ 晴 生
小包へ母はへそくり入れてやり 燗
小包に同封の手紙だけは書き 透

小包で愚息を頼む餅送る 秋 芳
小包の便り読むより先に食い 一 美
里からの小包襪襪ばかりなり 孝 平
旅先は小包子供宛に来る 素 泉
包紙裏へ返して帰つて来 時 夫
友情の小包季節の味で来る 冲 笛
小包へ母は入りたい物ばかり 耕 花
小包の中を腕白耳で当て 一 二

川 玉造支部句会 (大阪府)

八月

於 白柳子居 清水白柳子報

喉が出てときれくの祖父の愚痴 一 栄
食欲が出て来て垢を苦し出し 同
早口で解らぬ数上む隠れんぼ 朝 路
来客に裸のシャツが見当らず 登 志 子
百日咳子を連れたのがあんを逃げ 同
貰い風呂垢汲み出すも気兼ねして 貞 九 朗
男手に育つて耳に垢をため 清 子
聴衆の静まるを待つ暖ばらい 同
漢方に無いせん葉は爪の垢 真 佐 尾

川 米子支部句会 (米子市)

八月七日

於 西念寺 井上巖耕報

精霊はきれいな波に乗って去に 節 枝
片割は岸辺の波に辿りつき 量 子
ここまでは来ない波が来てあつて いづみ
波の音聞いて育つた子が溺れ 百 合
アベックの足跡波が消してくれ 八 糸
石投げて波紋見つけている孤独 庄 太
航海の疲れ波止場の灯がほぐす 散 歩
波の音眠れぬ妻に愚痴があり 無 閑
大波を跳べぬ子繩を持たされる 水 鏡

小さな波紋を残し女去に 蛙眼子
思いきり捨てたレターが波に舞い 禿 童
波風になびかす髪黒いこと 尚 子
波の音過ぎし昔の子守唄 風 来
波のちりうねくくと波の跡 吾 柳
さざ波を背にして帰る大漁船 雄 々
お役人だから食えてる無愛想 一 机
無愛想知つて夫も知らぬ顔 凍 死 路
顔役に不用な役割つけて置き 久 義
餌が来て急に泉水波を立て 素 飄
複雑な家庭で波紋の絶間なし 金 星
暫くは波にまかしたい話 新 雪
親馬鹿を笑う世間に子をかばい 天 邪 鬼
死んだ子へあきまぬ兼ねる親の馬鹿 青 香
奥様のぐちに追われる日曜日 康 江
白波に別れのテープ渦を巻き 秋 馬
目高まで魚でありたい波をたて すすむ
無愛想な顔して二日酔を悔い 千 柳
情熱の二人の跡を波が消し 美 笑

品質優良
タチカワペン先
TACHIKAWA PEN



ワビゼム 筆
カワゼム 画
カカワ 画
タチカワ 筆
タチカワ 筆

大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社

川 高知支部句会 (高知市)

大西迷客報

八月

消えて散る花火私の恋に似る 迷客
老らくの恋は息子に少し照れ 久平
絵の様な故郷であつて住みづらく 綾
此処からは故郷の道草履はく 俊一郎
もう帰る背に花火が又揚がり 玲羊
息子から一本取つたい煙草 呆亭
大学へやれば家業を嫌い出し 同
母さんも来ればよかつた花火会 佐智子
身に覚えあつて息子を許しとき 耕生
身寄などない故郷に墓があり 温夫
息子もう父と並んで髭を剃り 同
酔うて来た親父息子を撫でて飯 康平
一莞の花火真夏の夜の夢 慎一郎
欄干にはみ出しそなた花火客 寛
故郷に錦飾つて母はなく 海鳥
学終えて母なき故郷の土を踏み まさ
故郷には財産もある嘘に負け 白眼子

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

八月

於 五階講堂 橋本幸男報

瘦腕へバスコントロールの切実さ 方正
瘦腕に愛せた彼氏のイニシャル 草右
瘦腕で三人までを学士にし 春雄
ストッキング柄とりさりの草野球 恵風
ナース今日患者のためのひま 幸男
もう手術室は柑子の音ばかり 没食子
がんばつてねえで別れた手術室 桃村
手術もろ済んだか医者笑い声 斜水
何の手術か哭いている 愛論
気休めの手術と知らず手術する 竹莊
手術する金と信じて出してやり 路郎

帝化川柳会 (大阪市)

八月十九日

佐野白水報

残業と言訳出来ぬ千鳥足 春潮
言訳を考えながら遂に酔い 乱酔
扇風機首をかき上げたまゝ止り 一の水
扇風機も止めてヤバい追出す気 白水
エレベーター特売場で空になり 雅堂
エレベーター故障の朝に遅刻をし 一平
何一買わずに帰るエレベーター ライト
エレベーター人妻の息背に感じ 与呂志
ひやかしの客は知らぬエレベーター 一朗
インテリの理想は遂に嫁き遅れ 京一樓
ペンダゴも靴ダゴもあるインテリ 葉乙女

みをつくし川柳会 (大阪市)

八月二十三日

於 梨花居 戸田古方報

道づれの人を信じて盗まれる 花香
ひやめしさらし時計を見新開み 夢人
ひやめしらのまんま棺桶に足入れ 正斗
老らくの美事踊りの輪の手振 凡九郎
盆踊りみんな知つてる歌で幕 正斗

明和病院川柳青蛙会 (西宮市)

山本九里三報

現実に戻つて淋し岐れ路 健一
退院へ肥つた指で目を数え しげる
逢曳の団扇の動きだけおぼろ 飄馬
岐れ路もうそこまでと淋しがり 三茶
岐れ路唯一言が口に出ず 白涙
麦茶だて済まされぬないお客 葉茅露
こゝからはネオンに続く岐れ路 酔子
嬌声へ負けず燃えるバラの花 勝城寺
麦茶冷たしはつと気づいた忘れもの 鏡水
麦茶のむだけに銀行へ一寸寄り 立兒
毛虫は落ちてる毛をよがる 同
午下り団扇一つの部屋静か 薫

肩を借る母も瘦せたと知つた試歩 弦月
好きだとは云えず四角い詩を作り 九里三
晩酌のビールと仲よく麦茶冷え 善坊
落着いて一本喫つた岐れ路 牧人
雑川 おたまじゃくし会 (天理市)
七月十七日 於 附属病院面会室 菱田滿秋報

打上げの花火親子が浮き出され 花鶴美
川開き玉屋鍵屋の声につれ 福陸寿
遠花火二階の窓へ呼び込まれ 牧人
検校も音聞きに来る川開き 蛾灯
ふと話途絶え花火を遠く聞く 梨花
落ちて来る花火オールの手を休め 潮花
二人だけの涼みに邪魔が遂に入り 冬扇
夕涼み素顔にもある美しさ 貴通
いゝ仲と知らずに坐る涼み台 華蝶
山の子は壁にもたれて夕涼む 溪泉
盛り場を抜けて星空美しく 善坊
星の降る中へ眠つたバンガロー 満秋
朝星の鎌に露散る回復期 貴通
サングラス借金取りの目を逃れ 卑平
ニユールクックサクラまでかけせる 梅林
サングラスマンポリズムで濡歩する 季生
大家内母の強気に支えられ 千年
針仕事出そりな暖をぐつと耐え 香車
阪東ベルト川柳会 (神戸市)
飯尾寄与史報
地蔵盆接待配りで汗をかき 三平
立読み汗おとされた新刊書 比加留
標札を見直し汗をふきなまし 寄与史
みをつくしの鐘アナウンサー 歩つ歩
ランデブー邪魔にきいてるみをつくし 凡人
盆踊り鐘が鳴るのにかえりこぬ K M
みをつくしが鳴つてるまだ踊つてる 寄与史
山の手さびしさを増すみをつくし 同

季節一品料理 江戸前にぎりすし アベノ橋地下映画食通街
梅里の店
大萬
★大万川柳(第五十六回)を募る
兼題「誤 解」路郎先生選
締切・十月十五日(毎週五句以内)
発表・十月二十一日(府内指示)
投稿は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

宿題に今からするんやみをつくし 比加留
雑川 婦人友の会
八月
合せ鏡バックヘヤーははち代 糸潮
三日月が落ちて居る様な水鏡 時子
合せ鏡うしろ千両だと思ひ 有子
忠信をあわせ鏡で見る楽屋 千代美
姿見へ感傷すてた喪服立ち 白香
嫁ぐ日の鏡へ愁いつつまれず 定美
旅立ちの夫にも持たず娘鏡 初穂
白髪よむ鏡に春の空があり 民子
鏡台へ坐り下の子もろおしやま 梨里
来客にちよいと鏡をのぞいて出 文子
バスガイドバックミラーの中で笑み 花代子
手鏡を母に持たせた日本髪 葉乙女
舞扇鏡へ膝をトンと打ち 京
妻の座へいつしか鏡掛けもあせ 梨花
鏡なしではお化粧の出来ぬ嫁 花鶴美
子鏡上り目下り目ニヤンコの目 千永
出戻りの鏡兄嫁のと並び 節子
バックミラーへ遠慮なしやくの二人 富士子
秋の序曲朝の鏡のおもてにも 若菜
見習は鏡へ会釈して通り 葎乃

柳界展望

▼本社十旬會は、十月八日(土)午後六時半から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催。秋気清爽の作句シーズン、多数来会された
 ▼南区医師会杏林川柳會は九月二十日午後七時半から上汐町比呂史居で開催▼南海電鉄川柳會(大阪市)は、九月廿六日午後六時半から粉浜の南海親和寮で開催▼既報、川雜弓削支部(岡山県)主催の西日本川柳大會は九月廿五日午

山雨樓氏を偲ぶ

吉田 水車

山雨樓氏と私の柳縁は二十数年にもなる。そして私の号を今の水車にしたのにも一つのゆかりがある。それは川柳雜誌社の旬會へ初めて出席した折は私の名「二郎」を題としてそのまゝ使つて居たのでその夜何かの句が抜けて名のり「ジロウ」と答えたが丁度幹事に出て居られた山雨樓氏がこれを開きとがめて「路郎先生と同じような号を名乗るのは誰か」と半ば叱られたような事があった。斯うした所にも氏の先生をおもわれ

前十時弓削小学校新講堂で開催。以上何れも路郎主幹出席▼川雜淀川支部(大阪市)十月旬會は十月十一日午後六時から東淀川区三津屋北通四ノ二九・武部香林居で開催される。兼題「世渡り」「灯」「割箸」▼八月廿三日午後七時から三休橋・中島生々庵居で第七回大阪市民川柳大會各派打合會開催。大阪市教育委員会始め各派代表出席。本社から、春葉・香林・栗・摩太郎の四氏出席打合を了した▼川雜玉造支部(大阪市)九月旬會は第一例會を十日、第二例會を廿四日、何れも午後六時半から

白柳子居で開催▼大阪市交通局川柳會は十四日午後五時から同院サロームで九月例會開催▼川雜池田支部(池田市)は二十日午後五時半から梅田阪急電鉄本社で九月例會開催▼川雜堺支部(堺市)九月例會は二十日午後六時半から摩太郎居で開催。第七回堺市長杯は川村好郎氏獲得▼3・3・3川柳會(堺市)は九月旬會を六日午後五時半から島野工業會議室で開催▼川雜弓削支部(岡山県)は九月三日午後六時から金光教會で第廿一回町長杯争奪旬會開催。町長杯

は片山巷雨氏獲得▼川雜鳥取支部(鳥取市)は八月七日故中島鉄洲氏追善旬會を修營▼川雜米子支部(米子市)八月旬會は七日午後六時半から西念寺で開催▼川雜大原支部(岡山県)は九月四日午後六時から黒住教會で秋季川柳大會開催▼川雜赤坂支部(岡山県)旬會は九月一日夜戸川醫院で開催。優勝は戸川芳流氏獲得。なお同支部は八月十四日夜、愛生園慰問旬會開催▼川雜宇都支部(宇都市)は八月十三日午後六時から山陽荘で納涼川柳旬會開催▼川雜倉敷支部(倉敷市)は八月旬會を十四日午後六時から第四福田小学校で開催、盛會との事▼川雜下関支部(下関市)は八月七日納涼旬會として武久海水浴場 勉強亭で開催▼川雜備前支部(岡山県)旬會は八月廿七日午後六時から大森娛句楽居で開催▼川雜大原支部(岡山県)八月旬會は、十日午後六時から土井ゆたか居で開催▼岡山電報局川柳會(岡山市)は八月例會を廿七日午後六時から日赤支部で開催▼三井造船旬會(玉野市)は秋季川柳大會を八月三十日午後六時から三友クラブで開催、盛會の由▼葦川柳會(松江市)は創立滿三周年記念旬會を九月廿三日開催。路郎氏の特別課題「親ごゝろ」の選も披露される▼川柳阿部野支部は阿部野区王子町三ノ三四(移転、支部長は菊沢小松園氏に交送した。兵庫県日置青年団

旬會は、今回城東村青年団川柳クラブとして新発足、機関紙「川柳村」発行、川柳の普及を計る由▼塩浜一路氏(大阪市)は八月末退院、目下自宅に静養、一日も早く全快を祈る▼速水真珠洞氏(福岡市)は八月二十日大分県湯の平温泉山下湖を周遊「遠慮して芥を捨てる花の川」の句と、卅一日阿蘇外輪山めぐりをされた「やゝこしい話はよして湯に這入り」の句信を寄せられた▼龜井花童子氏(北海道)からの消息によると、八月七日の第三回海峽親善川柳大會は、九十余名の盛會の由▼増井不二也氏(兵庫県)は八月十四日阿波踊見物に往かれ、徳島の宿にて新聞紙上掲載「踊らな損々私も入れておくれやす」の路郎師句を懷まれ「更ける屋よしこの節の足拍子」の句信を寄せられた▼津田千舟氏(貝塚市)は八月十五日、近郷の盆踊りや墓参もされ久々に楽しき一日を味わわれたとの事▼種瓜平氏(東京都)は四月以来単身上京のところ、今回家族を迎え東京都杉並区阿佐ヶ谷四丁目三五二富士荘に居を定められた▼川柳長屋滿八年記念旬會(東京都)は九月十八日正午から東浴會館で開催▼故坂下也奈貴氏追悼旬會を八月二十日の午後一時から東浴會館で修營▼故高橋かほる氏夫人からお女さんは、七月廿六日阿部野区阿倍野筋八ノ六五にて逝去。謹悼。

る念の厚かつた事がしのばれるのである。勿論別に氏から改号を促された訳でも何でもなかったがその後自発的に今の号水車に改めたのである。その後氏の勤務先である鉄道の湊町運輸事務所での小集にも度々出席して居る内、氏を介して路郎先生から親しくお話を頂ける機会を得た。そして路郎先生門下の末席を汚す事にもなった様な浅からぬ柳縁につながる者として今度の氏の計に接して一入哀悼の念を深くするものである。

氏は甘党の方であったが同志の酒席には進んで出席、賑やかになる舞われた。当時大阪府下の八尾から通勤の氏は汽車の時間を気にしながら、もう五分あと三分とばかり残り惜しそりに付き合われたのも氏の厚き友情の現われにほかならぬと思う。

は片山巷雨氏獲得▼川雜鳥取支部(鳥取市)は八月七日故中島鉄洲氏追善旬會を修營▼川雜米子支部(米子市)八月旬會は七日午後六時半から西念寺で開催▼川雜大原支部(岡山県)は九月四日午後六時から黒住教會で秋季川柳大會開催▼川雜赤坂支部(岡山県)旬會は九月一日夜戸川醫院で開催。優勝は戸川芳流氏獲得。なお同支部は八月十四日夜、愛生園慰問旬會開催▼川雜宇都支部(宇都市)は八月十三日午後六時から山陽荘で納涼川柳旬會開催▼川雜倉敷支部(倉敷市)は八月旬會を十四日午後六時から第四福田小学校で開催、盛會との事▼川雜下関支部(下関市)は八月七日納涼旬會として武久海水浴場 勉強亭で開催▼川雜備前支部(岡山県)旬會は八月廿七日午後六時から大森娛句楽居で開催▼川雜大原支部(岡山県)八月旬會は、十日午後六時から土井ゆたか居で開催▼岡山電報局川柳會(岡山市)は八月例會を廿七日午後六時から日赤支部で開催▼三井造船旬會(玉野市)は秋季川柳大會を八月三十日午後六時から三友クラブで開催、盛會の由▼葦川柳會(松江市)は創立滿三周年記念旬會を九月廿三日開催。路郎氏の特別課題「親ごゝろ」の選も披露される▼川柳阿部野支部は阿部野区王子町三ノ三四(移転、支部長は菊沢小松園氏に交送した。兵庫県日置青年団

旬會は、今回城東村青年団川柳クラブとして新発足、機関紙「川柳村」発行、川柳の普及を計る由▼塩浜一路氏(大阪市)は八月末退院、目下自宅に静養、一日も早く全快を祈る▼速水真珠洞氏(福岡市)は八月二十日大分県湯の平温泉山下湖を周遊「遠慮して芥を捨てる花の川」の句と、卅一日阿蘇外輪山めぐりをされた「やゝこしい話はよして湯に這入り」の句信を寄せられた▼龜井花童子氏(北海道)からの消息によると、八月七日の第三回海峽親善川柳大會は、九十余名の盛會の由▼増井不二也氏(兵庫県)は八月十四日阿波踊見物に往かれ、徳島の宿にて新聞紙上掲載「踊らな損々私も入れておくれやす」の路郎師句を懷まれ「更ける屋よしこの節の足拍子」の句信を寄せられた▼津田千舟氏(貝塚市)は八月十五日、近郷の盆踊りや墓参もされ久々に楽しき一日を味わわれたとの事▼種瓜平氏(東京都)は四月以来単身上京のところ、今回家族を迎え東京都杉並区阿佐ヶ谷四丁目三五二富士荘に居を定められた▼川柳長屋滿八年記念旬會(東京都)は九月十八日正午から東浴會館で開催▼故坂下也奈貴氏追悼旬會を八月二十日の午後一時から東浴會館で修營▼故高橋かほる氏夫人からお女さんは、七月廿六日阿部野区阿倍野筋八ノ六五にて逝去。謹悼。

(摩)

不朽洞

会から

▼路郎師は十月八日午前六時四十五分からJOBK第 二放送「趣味の栗」の時間に、B K川柳の会九月の第七回大阪市民川柳大会打合のため、八月廿九日午後六時から本社で常任幹事会開催。路郎師を始め審理理事長、香林・栗西副理事長、白柳子・文蝶・小松園・淡舟・摩天郎の各常任理事出席、種々協議された▼戸倉蒼天氏(兵庫県)は、氷上町新設に伴う町長・議員選挙に応援、多忙を極められた由▼菊沢小松園氏(大阪市)は八月十九日夕々に六甲登山、「山荘に響くマンボは霧に融け」の句信を寄せられた▼不二田一三夫氏(大阪市)は、朝日新聞のキヤッチ・フリーズに佳作一等(一万円)入選、九月本社川柳忌句会に地位、重なる栄冠お慶び申上る▼路郎師は今回大阪府警察本部の委嘱により同部発行機関紙「なにわ」川柳欄の選を担当される▼富岡淡舟氏(大阪市)実姉かつ氏は八月十五日松原市阿保の自邸で逝去、享年五十九才。謹悼▼丸尾潮花氏(大阪市)は、川雑・婦人友の会の発展に目下忙殺されて居られる▼阪田良坊氏(下関市)は今回、病氣全快、九月一日から勤務され、「院長の病んで病舎のひる静か」の蘇人氏の句を始め、多数柳友から寄せられた友情を喜び

「東西に友あり遠路に厚き情」と來信。又、九月三日には広島鉄道病院に於ける山陽交通災害医学会準備理事会に出席された▼本田恵二郎氏(岡山県)からの消息に依ると、九月四日句会出席芳々岡村牛耕氏の來訪を受け久々に柳野ト占氏(八代市)は関西修学旅行引率のため八月廿九日同地出発、京都・伊勢・大阪を経て九月三日帰郷。なお、十月廿六日再び上阪、路郎師に面会を楽しんで居られる由▼新川博也氏(大阪府)夫人、九月一日男子出生「産声はやんちゃな子だよ、男だよ」博也▼築山快夢起氏(ホノルル市)は九月十二日羽田着、京浜を振り出しに各地を周遊、西下して十月中旬に路郎師とも対面されることとなった▼井野格一氏は八月限り、光好三四詩氏、水谷鮎美氏、須崎豆秋氏は九月限り、夫々家事の都合で退会された。(摩)

新会員紹介

野村 初 甫 (大阪市) 正

水客氏推薦



公・私・雑・記

★作句のシーズンが来た。夜長を

ムダにしないことである★各地の柳誌もだん／＼よくなって来た。いい雑誌が殖えることは愉快なことである★雀郎君が「せんりう」に「啄木短歌に対する川柳の影響」という一文を草している。紅衣とのつながりで啄木が、川柳の影響をうけたのではなからうかと云うのである。ネライはなか／＼面白い。雀郎君ならではと思つて、面白く読んだが、大阪に永住していた虹衣の筆にも口にもそのことに関しては何等残していないことを思うと、啄木は特に川柳から影響をうけた訳ではあるまい。それよりも歌人として大隈言道あたりの影響の方が大きいのではなからうか。しかし雀郎君の研究はもっと続けて欲しいと思うので何か文献を発見したら同君まで知らしてもらいたい★柳祖の句碑が全国柳人の浄財で竜宝寺に九月廿三日に再建される。有難いことである。自分も委員の一人として東上するつもりであったが緊急な用件で果さなかった。地元の柳友の骨折を深謝している★九月廿五日に岡山県の弓削で開かれる西日本川柳大会へ廿四日から出かけることになつている。又多くの柳人に会えると思うと愉快である。胸襟を開いて語れると云ふことは人間にとって最大の幸福である。

(路)

麻生 葎 乃 著・米田三男之介装幀

葎乃 福壽草

定價二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

★毎日新聞(大阪)評——著者は「川柳雑誌」を主宰する麻生路郎氏の夫人で柳歴四十余年といえは女流川柳家でも最古の一人。最近三十年の句から選んで初めて個人句集として出したのが本書である。福壽草にしたがいそろがし飲んでほしやめても欲しい酒をつぎデパートを出たら灯もつき雨も降りフイクションのない叙情詩的な作品に秀れたものが多い。★山陽新聞評——山陽新聞川柳欄の選者、麻生路郎氏夫人葎乃さんの句集「旅人」と一対をなすべきである。福壽草の名は「福壽草松」にしたがいそろがしこの川柳から採られたものであるが、この句がよく夫人の性格をものがたり、この句集のバックボーンとなつていく。葎乃さんには「飲んでほしや

めても欲しい酒をつぎ」の名句があることは早くから知られていたが、今女史四十五年の作句生活から、珠玉の五百数十句を一本に集めて見て非常に興味深い(略)何よりも一貫して流れるヒューマニズムと詩情はこの句集をして一層高いものたらしめて居る。(T)★北国新聞評——著者は北国柳壇選者、川柳雑誌主宰麻生路郎氏夫人である。「明治の末から今日まで続いている女流川柳家は葎乃くらしいものである。葎乃にしても僕と結婚してはなかつたら遠の昔にやめていたのに違いない……」と路郎氏がその序で述べているが、四十二年間の句に結ばれた美しい夫婦愛。福壽草松にしたがいそろがし飲んでほしやめても欲しい酒をつぎなど女としての家庭への愛情の句がこの句集に盛られていて胸を衝く。

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五の二五

電話住吉(07)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

THE SENRYU ZASSHI

NO. 341

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧を
忘れよう!



サーピナ錠

1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠! 成分含量も多くてお得です

山之内

スマートで
着心地のよい

**O.S.K.の
レディモード**

大坂商店
大阪市東区船場一丁目ニホ北
電話 06(94)1745-5463番

あやめ池菊花ルナパーク

主催 毎日新聞社 10月1日 → 11月27日

- ・菊人形歌舞伎のふる里名作選 見流し全20場
- ・大坂松竹歌劇団 秋のおどり… 続白鷺の騎士 全20段
米花真砂子・牧香織ほか出演 平日3回 休日4回公演
- ・重謡菊人形・菊花壇めぐり・菊の科学館・菊花コンクール
- ・日曜、祝日 楽しいアトラクション開催

入園料 100円 小人 50円 割引入園券つき乗車券発売

近畿日本鉄道